

吉森遺跡Ⅱ

—福岡県糸島市二丈吉井所在中世遺跡の調査—

中山間地域総合整備事業福吉地区関係埋蔵文化財調査報告・Ⅴ

糸島市文化財調査報告書

第8集

2012

糸島市教育委員会



水坑口出土銅器

序

この報告書は、中山間地域総合整備事業「福吉地区」に関連して緊急調査した吉森遺跡の発掘調査の記録の一部であります。

本書が考古学研究の一資料となり、文化財の保護と活用に広く利用されることを願います。

平成24年3月31日

糸島市教育委員会 教育長 菊池俊秀

例 言

1. 本書は、福岡県糸島郡二丈町(現：糸島市)大字吉井字吉森に所在した吉森遺跡の第3次調査の記録である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費補助を受けて実施した。
3. 発掘調査の調査主体は二丈町教育委員会(現：糸島市教育委員会)である。
4. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図の作成は、村上 敦が行った。
5. 本書に掲載した図面の製図は村上が行い、藤野ゆかり氏の協力を得た。
6. 本書に掲載した写真の撮影は、空中写真を除き村上が行った。
7. 本書に掲載した空中写真は、有限会社 空中写真企画に委託した。
8. 本書で用いた座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系に基づいており、北方位は全て座標北である。
9. 本書で用いた水準値は、T.P.値(東京湾平均海面値)である。
10. 遺物の色調については、「新版 標準土色帖 1997年度版」の表記法に従った部分があり、その場合は色記号と土色名を併記した。
11. 陶磁器の分類については、山本信夫 2000「大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」太宰府市の文化財 第49集による。
12. 図版の遺物写真に付した番号は、掲載した挿図中の番号を示す。
13. 本書の執筆編集は、村上が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	7
1. 調査の経過	7
2. 遺構と遺物	9
埋甕遺構	9
井戸状遺構	9
竪穴遺構	11
木棺墓	12
掘立柱建物跡	14
方形石組遺構	24
円形石組遺構	24
その他の遺構	26
IV. おわりに	44

挿図目次

第1図 糸島市西部域図(縮尺1/50,000)	3
第2図 遺跡周辺地形図・1(縮尺1/20,000)	4
第3図 遺跡周辺地形図・2(縮尺1/2,500)	6
第4図 遺構配置図(縮尺1/500)	8
第5図 埋甕遺構実測図(縮尺1/20)	9
第6図 埋甕遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)	9
第7図 井戸状遺構実測図(縮尺1/40)	10
第8図 井戸状遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)	10
第9図 竪穴遺構実測図(縮尺1/40)	11

第10図	木棺墓実測図(縮尺1/20)	12
第11図	木棺墓出土遺物実測図(縮尺1/3)	13
第12図	1号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)	15
第13図	2号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)	18
第14図	3号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)	20
第15図	4号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)	21
第16図	5号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)	22
第17図	掘立柱建物跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	23
第18図	方形石組遺構実測図(縮尺1/50)	24
第19図	円形石組遺構実測図(縮尺1/50)	24
第20図	石組遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)	25
第21図	その他の遺構実測図・1(縮尺1/50)	27
第22図	その他の遺構実測図・2(縮尺1/50)	29
第23図	その他の遺構出土遺物実測図・1(縮尺1/3)	31
第24図	その他の遺構出土遺物実測図・2(縮尺1/3)	33
第25図	その他の遺構出土遺物実測図・3(縮尺1/3)	35
第26図	その他の遺構出土遺物実測図・4(縮尺1/3)	37
第27図	その他の遺構出土遺物実測図・5(縮尺1/3)	39
第28図	その他の遺構出土遺物実測図・6(縮尺1/3)	40
第29図	その他の遺構出土遺物実測図・7(縮尺1/3)	41
第30図	その他の遺構出土遺物実測図・8(縮尺1/3)	42
第31図	その他の遺構出土遺物実測図・9(縮尺1/3)	43

図版目次

巻頭図版 木棺墓出土青磁

図版 1 調査区全景(空中写真)

図版 2 (上段)調査区上空から十坊山方面を望む(空中写真)

(下段)調査区上空から浮嶽方面を望む(空中写真)

図版 3 (上段)調査区上空から唐津湾方面を望む(空中写真)

(下段)木棺墓周辺(空中写真)

図版 4 (上段)埋甕遺構(北から)

(下段)井戸状遺構(南から)

- 図版 5 〈上段〉1号竪穴遺構(南から)
〈下段〉2号竪穴遺構(南から)
- 図版 6 〈上段〉木棺墓全景(南から)
〈下段〉木棺墓内遺物出土状況(西から)
- 図版 7 〈上段〉方形石組遺構(南から)
〈下段〉円形石組遺構(南から)
- 図版 8 埋甕遺構出土遺物
石組遺構出土遺物
- 図版 9 井戸状遺構出土遺物
- 図版10 木棺墓出土遺物・1
- 図版11 木棺墓出土遺物・2
- 図版12 掘立柱建物跡出土遺物
- 図版13 その他の遺構出土遺物・1(1~7)
- 図版14 その他の遺構出土遺物・2(9~11, 13, 14)
- 図版15 その他の遺構出土遺物・3(15~19)
- 図版16 その他の遺構出土遺物・4(20~23)
- 図版17 その他の遺構出土遺物・5(24~27)
- 図版18 その他の遺構出土遺物・6(28)
- 図版19 その他の遺構出土遺物・7(29)
- 図版20 その他の遺構出土遺物・8(30~32, 40)
- 図版21 その他の遺構出土遺物・9(33)
- 図版22 その他の遺構出土遺物・10(34, 35)
- 図版23 その他の遺構出土遺物・11(36~39)
- 図版24 その他の遺構出土遺物・12(42~45, 47)
- 図版25 その他の遺構出土遺物・13(48~51)
- 図版26 その他の遺構出土遺物・14(52~56)
- 図版27 その他の遺構出土遺物・15(57~59)
- 図版28 その他の遺構出土遺物・16(60~63, 72)
- 図版29 その他の遺構出土遺物・17(64~71)
- 図版30 その他の遺構出土遺物・18(41, 73~75)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

今回報告する吉森遺跡3次調査は、吉森遺跡1次、2次調査と調査原因を同じくし、農林水産省所管の中山間地域総合整備事業「福吉地区」に拠るものである。二丈町教育委員会は、事業主体者である福岡県福岡農林事務所との協議により平成11年度から試掘調査を行い、遺構が検出された地点においては遺跡の破壊を免れるべく計画変更の要請を行ったものの、計画の変更は大幅な予算の増加を伴うために困難であり、平成11年12月の吉森遺跡1次調査を皮切りに、平成12年度には吉森遺跡2次調査、中越遺跡、末広遺跡、為次遺跡、平成13年度には吉森遺跡3次調査、平成14年度には柚木田遺跡、大門遺跡の発掘調査を行うこととなった。本報告は、平成13年度に行った吉森遺跡3次調査の記録の一部である。調査期間については表1にまとめた。

2. 調査組織

発掘調査	調査主体	二丈町教育委員会	教育長	藤田孝治
	調査総括		教育課 課長	青木樞夫
			課長補佐	大庭一成
	調査担当		社会教育係長	浦田 豊
	(発掘調査作業員)	阿部恵美子、阿部庄吾、草場 伝、永田光恵、宮崎千鶴、山崎未治、渡辺拓馬	社会教育係主任	村上 敦
報告書作成	調査主体	糸島市教育委員会	教育長	菊池俊秀
	調査総括		教育部 部長	宗 哲夫
			文化課 課長	池田龍司
			課長補佐	洞 龍二郎
	調査担当		発掘調査係長	角 浩行
	(遺物整理作業員)	阿部恵美子、木下文子、永田光恵、宮崎哲雄	主 幹	村上 敦

表1 中山間地域総合整備事業関係発掘調査一覧

遺 跡 名	調 査 期 間	報 告 書
吉森遺跡1次調査	平成11年12月10日～平成12年 3月31日	吉森遺跡Ⅰ 糸島市文化財調査報告書第5集 2011
吉森遺跡2次調査	平成12年 4月 6日～平成12年 6月30日	
中越遺跡1次調査	平成12年 9月10日～平成13年 2月 7日	吉井地区遺跡群Ⅱ 二丈町文化財調査報告書第30集 2003
末広遺跡	平成12年12月 3日～平成13年 1月19日	吉井地区遺跡群Ⅰ 二丈町文化財調査報告書第28集 2002
為次遺跡	平成13年 1月23日～平成13年 4月20日	
中越遺跡2次調査	平成13年 4月20日～平成13年 7月31日	吉井地区遺跡群Ⅱ 二丈町文化財調査報告書第30集 2003
吉森遺跡3次調査	平成13年10月 1日～平成14年 3月29日	本 報 告
柚木田遺跡	平成14年 4月 1日～平成14年10月31日	吉井地区遺跡群Ⅲ 二丈町文化財調査報告書第32集 2004
大門遺跡	平成14年11月 1日～平成14年12月24日	未 報 告

II. 位置と環境

吉森遺跡は福岡県の西端部、糸島市二丈吉井字吉森に位置し、遺跡の背後に聳える脊振山地は福岡県と佐賀県とを南北に画す。この山塊はその大部分が糸島型或いは早良型と呼ばれる花崗閃緑岩からなり、山頂部付近には深層風化に取り残された巨大な岩体が散見される。山地の西端部に位置する浮嶽(標高805.2m)と十坊山(標高535.4m)の北麓は、その狭間にやや緩やかな幅の狭い斜面を形成し、僅かな平地を経て海に没する。この斜面は、その周辺の急峻な斜面から比較するとやや緩やかではあるが、中山間地域総合整備事業の要件を満たす程に急な斜面である。終戦直後の米軍による空中写真を見ればその殆ど全域に人の手が及んでおり、現在に存続する集落の建物敷地以外の大半が農地として利用されていたことが分かるが、平成12年度に行った末広遺跡と為次遺跡の発掘調査によれば、平安時代後期から中世前期にかけては、農地以外の利用があったことが分かる。これは、このエリアが佐賀県側へ白木峠を経て山越えするルート上に位置していたこと、浮嶽神社周辺の宗教的な環境などに起因するものと思われる。

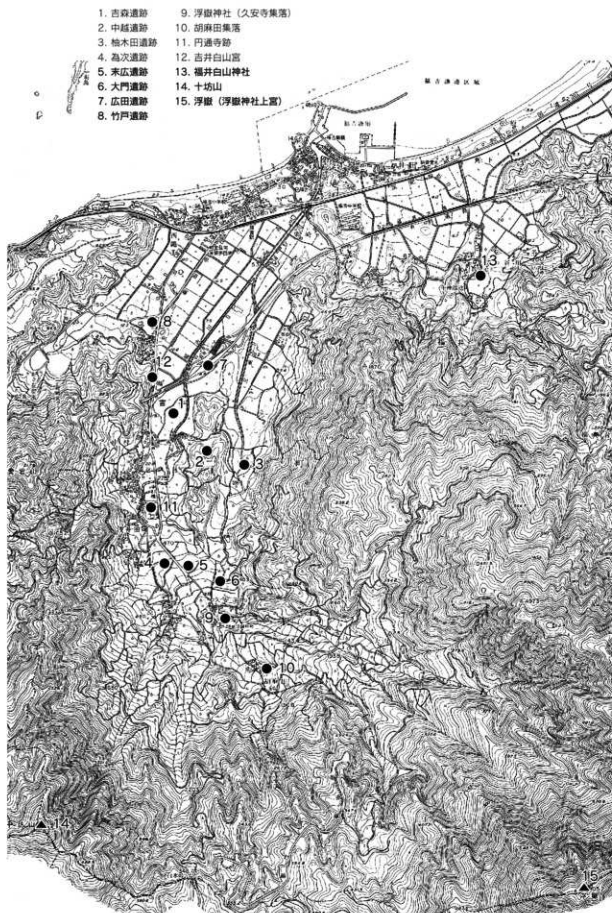
吉森遺跡の南南東1.2kmに位置するこの浮嶽神社の創建年代は不明であるが、神功皇后の戦勝祈願にまつわる創建伝説や、怡土郡七ヶ寺に関する伝承が残されている。神功皇后にまつわる伝説は糸島地区の各所に残されているが、怡土郡七ヶ寺の伝承地の多くがその伝説を伴っている。怡土郡七ヶ寺という括りは、文献としては「筑陽記」が初出であり、聖武天皇の勅願によりインド僧清賀によって怡土郡内に創建されたとされる寺院群である。西から列挙すれば、浮嶽山久安寺(糸島市二丈吉井)、一貴山夷巖寺(糸島市二丈一貴山)、小倉山小藏寺(糸島市白糸)、楠田寺(糸島市東)、雷山千如寺(糸島市雷山)、染井山靈鷲寺(糸島市大門・高米寺)、鉢伏山金剛寺(福岡市西区今宿上ノ原)であり、規模の差はあれどそれぞれの場所に何らかの宗教的施設が残るので、創建の由来はともかく実在した寺院群であることは間違いないであろう。「筑前国統風土記」等によれば全て真言宗であったというが、必ずしもそうではなく、密教系であったという意味合いであると思われる。楠田寺以外は急峻な山地を背後にもつ。

かつて浮嶽山久安寺には、院主坊、清永坊、浄至坊、奥ノ坊、正桂坊、大門坊、寺司坊、杖立坊、正覚坊、道寶坊の十坊があったとされるが、建徳三(1372)年頃に書かれたものと思われる「久安寺總山大小佛事等留帳」にはこれら以外にも、道意坊、妙覚坊、忍性坊、清谷坊、寺主園などの名前が見える。これらのうちの清永坊は浮嶽神社の宮司家でもあり、神社と宮司家の所在する集落名は「久安寺(きわじ)」である。天保七(1836)年建立の狛犬には「別当大僧部法印 清永坊現住 戒賢院永純」の銘が残り、近世文書の中にも山伏としての清永坊の名を散見することができる。現在、浮嶽神社に所蔵されている仏像群は、少なくとも明治初頭までは存続したこの清永坊に伝来したものであり、廃仏毀釈の風潮の中で一時期はその屋根裏に放置されていたという。これらの仏像群のうちの3体は平安時代前半の作で国指定の重要文化財であり、いずれも肘付近から先を欠損しているので尊名を明らかにすることは困難であるが、木造地藏菩薩立像、木造仏坐像、木造如来形立像の名称で指定がなされている。木造地藏菩薩立像、木造仏坐像は9世紀半ば、木造如来形立像は9世紀後半の作と考えられている。

天文二十(1551)年までは存続したとされる他の坊の所在地は不明であるが、辛うじて字「大門」のみ小字名として残される。その北側に接する末広遺跡からは、13世紀代の青磁2点などを調査す



第1圖 糸島市西部城図(縮尺 1/50,000)



る土壌墓や、掘立柱建物跡などが検出されているので、何らかの関連があるものであろう。また浮嶽神社の山手にあたる南側に隣接する集落名は「胡麻田」であり、「護摩壇」からの転化を思わせ、密教的な宗教空間の存在を窺わせる。また浮嶽神社の北西0.7km、吉森遺跡の南南西0.6kmに位置する高台には、円通寺跡と言われる場所がある。真言宗の寺院であったが久安寺と同じく豊臣秀吉による焼き討ちにより焼亡したという伝承をもつ。吉井氏の墓と伝えられる宝篋印塔を中心とした数十の中世石塔群が残されており、久安寺の坊の一つであった可能性もある。吉井氏とは、武蔵国より下向した荒川清氏を祖とする氏族であり、二丈町誌・昭和42年版によれば吾妻鏡(寛文二(1244)年七月十六日)に登場する筑後国御家人吉井四郎長廣は、清氏の孫にあたとされる。戦国時代末期には原田氏に属して吉井岳城を構え、いくつかの合戦で活躍した。

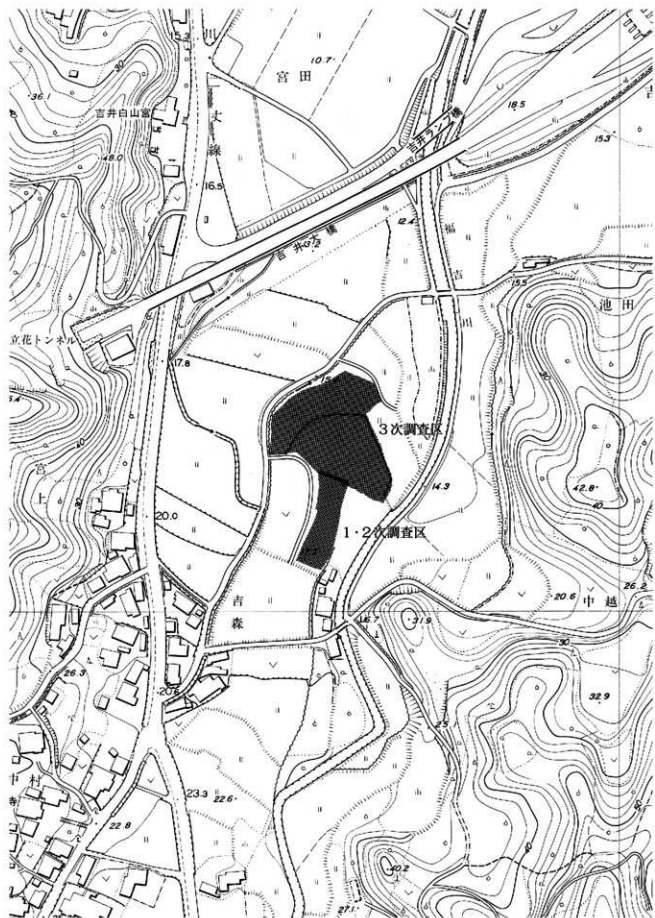
なお、浮嶽神社と吉井白山宮は、白山妙理権現の三宮を構成する。上宮は浮嶽の山頂(標高805m)の浮嶽神社上宮であり、伊弉諾尊を祀る。中宮は久安寺集落(標高100m)に所在する浮嶽神社であり、祭神は伊弉册尊と菊理姫である。何故、男性神の伊弉諾尊のみを上宮に祀るのかについては興味深いところである。下宮は浮嶽の麓(標高15m)にある吉井白山宮であり、伊弉諾尊、伊弉册尊、菊理姫の三神を祀る。毎年10月に行われる神幸祭では、大名行列に扮し神輿を担いだ行列は浮嶽神社中宮を発し、吉井白山宮で合流した後、海に面した御旅所へと向かう。

吉井白山宮はその社伝によれば、「神亀二(725)年に加賀国石川郡より勧請」され、近世においては「吉井村、吉井浦、鹿家村、福井村、福井浦の惣社」であり、「古来水旱疾疫等アレハ五箇村ノ寺僧社人山伏等悉ク当社ニ集マリ祈祷ヲナス」ところであったという。また、建武年間に書写された可能性がある「佐賀県福満寺所蔵 大般若波羅蜜多經 卷10」には「筑前国怡土庄吉井村白山宮御経也」という奥書があり、中世における活発な活動が窺える。

なお、この一帯は白山神社が濃密に分布する地域である。先述の2社の他にも、旧福井村には福井白山神社及びそこから近世期に勧請された大入白山神社、旧鹿家村には吉井白山宮から同じく近世期に勧請された鹿家白山神社がある。旧長石村には白山神社(現在は長石寶満宮に合祀)があり、所在地は不明であるが「福岡縣地理全誌」によれば旧川付村にも白山神社があったといい、浮嶽南麓の佐賀県側に複数の白山神社或いはその跡地が存在する。また二丈岳(標高722m)の山頂には白山大権現が祀られ、ここからは浮嶽と女嶽(標高748m)の美しい神奈備形が並列する姿を望むことができる。

女嶽は「真名子十坊(とんぼう)山」とも呼ばれていたことが「筑前国統風土記」や「福岡県地理全誌」に記されており、未だ確認されていない「坊」が存在し、浮嶽、女嶽、二丈岳の三山で宗教的空間を構成していた可能性もある。

また二丈岳の北東山麓の旧一貴山村には、怡土郡七ヶ寺の一つである一貴山夷嶽寺の伝承が残る。一貴山夷嶽寺は天台系密教寺院であったものと考えられ、現在でも天台大師智頭の肖像が描かれた掛け軸を用いた天台大師講や、山頂の白山大権現の祠や8合目付近の窟内に安置された石製の観音像(通称:穴観音)に参詣する二丈岳参りが一貴山集落の住民によって行われている。これらは、一貴山夷嶽寺と天台宗、白山信仰との関わりを示す重要な行事でもある。また、新潟県の佐渡島の蓮華峰寺骨堂からは「筑前國 怡土庄 一貴寺 上野坊 讚岐坊 □□□ 貞和四年八月十九」「□土 一貴寺 □聖 讚岐□ 同行三人 貞和四年八月廿」などの墨書による落書きが発見されており、南北朝期の糸島地域の動向を知るうえで貴重な発見である。



第3図 道跡周辺地形図・2(縮尺1/2,500)

(参考文献)

堀本一策 2004「佐賀県・福満寺所蔵「大般若波羅蜜多經」について ～筑前国怡土庄・原田庄関係新出史料の紹介と検討～」『福岡市博物館研究紀要第14号』

普請帳研究会編 1984「佐渡国蓮華峰寺骨堂修理工事報告書」

戸根与八郎 1989「蓮華峰寺骨堂」『佛教芸術 182号』

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の経過

3次調査は各種の調整を終えた平成13年9月から開始した。表土の除去は0.7㎡のバックホーを使用し、全域の耕作土を除去した後、遺構面を検出しながら基盤土等の除去を行った。調査区の東側は、過去の耕地整備等により削平された結果1m近い落差があり、試掘調査によっても遺構の検出されなかった部分であったため土置場として使用し、表土を耕作土と基盤土に分けて仮置きした。

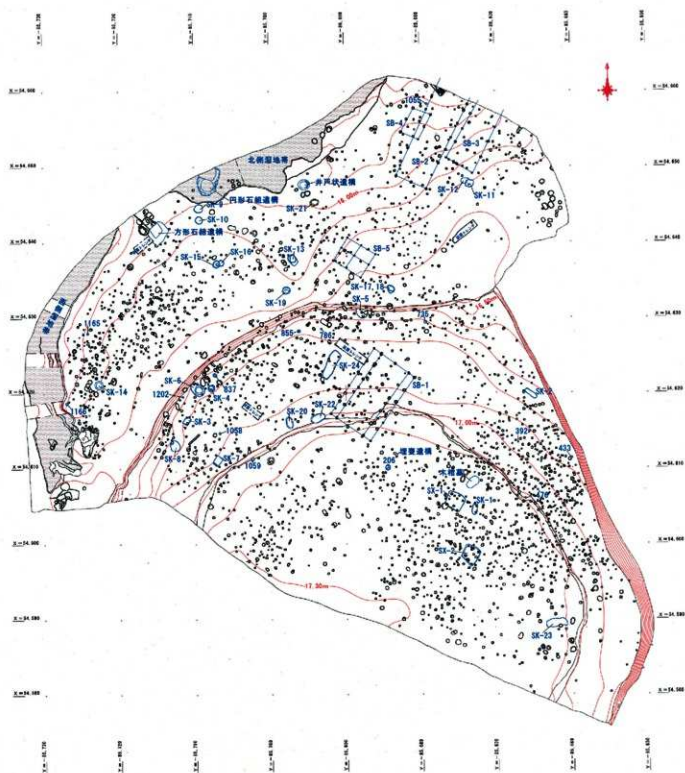
遺構面は概ね明黄褐色の粘質土であり、ピット等の埋土の色調は黒色或いは灰色系であったので遺構面の検出は比較的容易であり、表土除去の殆どは重機によって行うことができた。

遺構検出面の地形は、2次調査区との接点付近が最も高くそこから北側に向かって同心円状に緩やかに低くなっていた。調査前は2枚の水田となっていたが、南側の水田は少なくとも2枚の水田を1枚に整備したものであり、10cm程度の段差が検出された。また調査区北西部の町道中村前田線に接した部分は、調査前の耕作面からは1m前後の落差があり、その手前の5～6mのあたりからは遺物を多量に含む黒色系の粘質土が堆積していた。周辺の地形や試掘調査の結果から判断すると、この部分は丘陵の先端部にあたり、北側に広がる湿地帯に接した廃棄場として利用されたものと考えられ、多くの遺物が出土した。陶磁器の関して言えば、完形に近いものが多く見られるのが特徴的である。

遺構の検出は比較的容易であり、表土除去の段階で既に多くのピットが視認されていたが、作業員を導入しての精査によってさらに多くの遺構が検出された。ピット等から出土した遺物の殆どは細片で図示できるものは少なく、土坑等からの出土遺物も同様であったが、光波測量機を使用して位置を記録しながら連続した番号を付して全てを取り上げた。最終的には1,200を超える数となり、この取り上げ番号を遺構番号として扱い、文章中にも(N₀XX遺構)と表記した。よって遺物が全く出土しなかった遺構についてはその番号が付されていないが、2,000を超えるピットが検出されているものと思われる。またピットの密度が高く、掘立柱建物の確認が困難であり現地調査段階においては確認することができなかった。よって今回報告するもの以外にも多数の建築物が存在している可能性がある。

今回の調査において最も注目された遺構は、龍泉窯系青磁椀2点、同安窯系青磁皿4点が副葬された木棺墓の存在であった。

その他にも鍛冶関連の遺構、遺物が出ているが、これらについては別に報告する予定である。



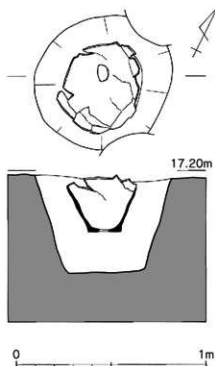
第4図 遺構配置図(縮尺1/500)

2. 遺構と遺物

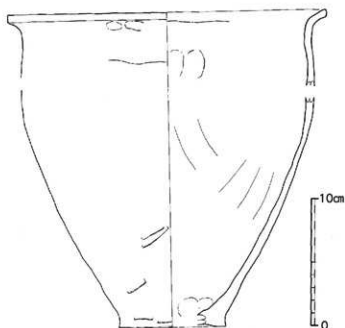
埋壘遺構(第5・6図)

調査区中心部(X=54,620.00, Y=-85,690.00)から東南に約11mの地点で検出された。平面形は円形を呈する直径0.7m、深さ0.5mの土坑に、甕形土器が据えられていた。甕の底部には楕円形の穴が穿たれている。遺構実測の段階では口縁部は確認できなかったが、遺物整理の段階で5cm程の口縁部の破片が確認されたため遺物実測図には図示している。

第6図は、弥生時代中期の甕形土器である。復元口径25.2cm、胴部最大径23.0cm、底径8.1cmを測る。器表の色調は橙色(5YR 6/6)を呈し、1mm以下の小砂粒を多く含む。



第5図 埋壘遺構実測図(縮尺1/20)



第6図 埋壘遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

井戸状遺構(第7・8図)

調査区中心部から北北西に約27mの地点で検出された。平面形は円形を呈する土坑であり、遺構検出面で直径1.34~1.56m、底面で直径0.9mを測る。深さは検出面下1.6mまで掘り下げたものの、湧水により完掘はできなかった。中位よりやや上部に小さな段がある。木柵等は検出されていないがその形状から井戸であるものと思われる。出土遺物は土師器小皿、土師器杯、瓦器椀、石鏝を再利用した滑石製品、朝鮮系無軸陶器などであるが、土師器小皿は遺構検出面から1.10m掘り下げた箇所から出土しており、井戸が埋め戻される過程において投棄されたものと思われ、この遺構の下限時期を示すものと考えられる。

1は土師器の小皿である。口径9.6cm、器高1.0cm、底径7.4cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りであり、板目状圧痕が残る。器表の色調は橙色(7.5YR 7/6)を呈し、胎土には1mm以下の小砂粒及び赤色粒を少量含む。

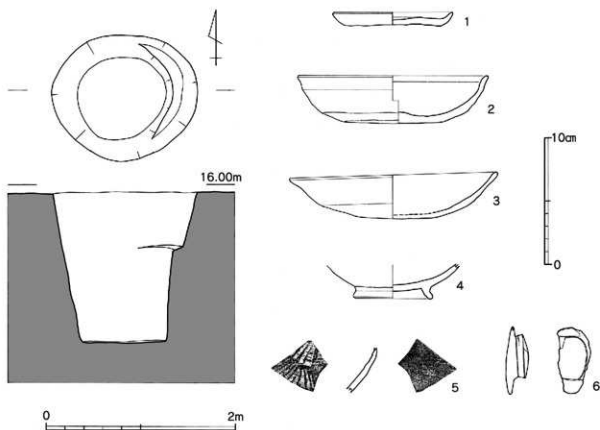
2は土師器の杯である。復元口径15.1cm、底径3.9cm、器高7.9cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りによる。底部は丸底化し、内面にはコテあて痕が残る。胎土の色調はにぶい橙色(7.5YR 6/4)を呈し、2mm以下の小砂粒を少量と0.5mm以下の雲母と砂粒を多く含む。

3は土師器の丸底杯である。底部押し出し成型による。口径16.5cm、器高3.6cmを測る。器表の色調は灰白色(10YR 8/2)を呈する。胎土には2mm以下の小砂粒を少量含む。

4は黒色土器の椀である。高台径は6.0~6.4cmを測り、体部に張り付けられる。器表の色調は黒褐色(7.5YR 3/1)を呈し、1mm以下の小砂粒を僅かに含む。

5は朝鮮系陶器の壺と思われる小片である。器表の色調は、内外面ともに灰色(N4/)、断面は灰赤色(2.5YR 4/2)を呈し、胎土には不純物を殆ど含まないが、白色の粘土状のものが層状に混入している。器面調整は、外面はタタキ痕をナデ消し、内面には放射状の当て具痕が残る。

6は滑石製のスタンプ状石製品である。摘みの穿孔部分より半裁されており、穿孔部の内壁には赤色顔料が付着する。体部の上面には2次加工後に煤が付着する。



第7図 井戸状遺構実測図(縮尺1/40)

第8図 井戸状遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

竪穴遺構(第9図)

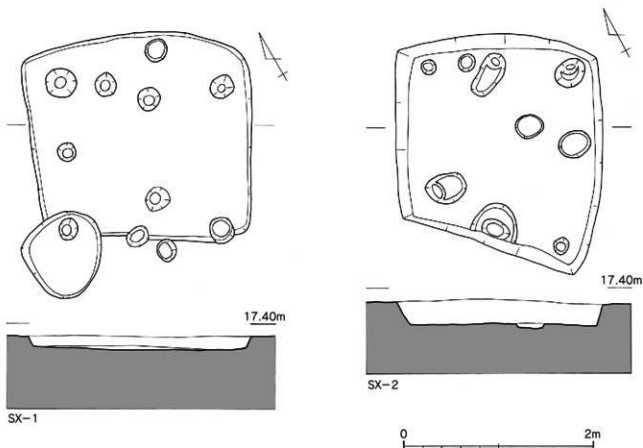
調査区の南東部で2基の竪穴住居状の遺構を検出した。大きさや形状は古代の竪穴住居に類似するが、中世の遺構である。南九州に類例が多い。

1号竪穴遺構(SX-1)

調査区中心部から東南に約20mの地点に位置する。2.20×2.32mの方形を呈し、対角線をほぼ東西及び南北方向に向ける。深さは0.12mを測る。床面は平坦であり、四隅にある柱穴で身舎を保っていたものと思われる。出土遺物は小片のみで図示できるものはないが、黒色土器B類や須恵質の布目瓦片が含まれる一方、磁器が全く含まれない。

2号竪穴遺構(SX-2)

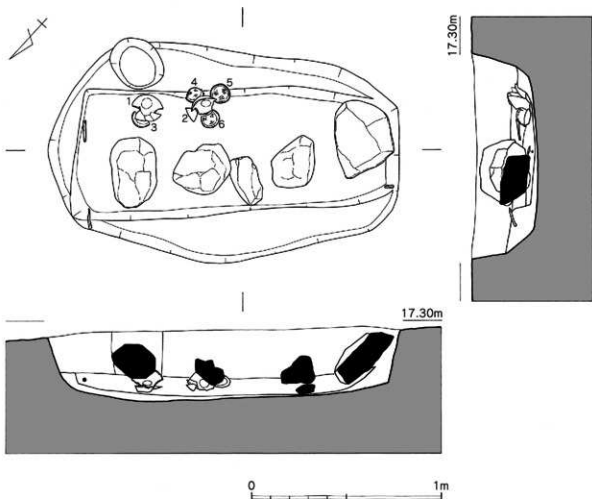
1号竪穴遺構の南4.5mに位置する。2.18×2.28mの歪んだ方形を呈し、対角線をほぼ東西及び南北方向に向ける。深さは0.26mを測る。床面は平坦であるが遺構に伴う柱穴は確認できなかった。出土遺物は土師器小皿(第23図-4)、白磁碗V類、龍泉窯系青磁碗II類の出土があり、13世紀前後の遺構であると考える。



第9図 竪穴遺構実測図(縮尺1/40)

木棺墓(第10・11図)

調査区中心部から東南に約20mの地点に位置する。周囲には多くのピットや土坑があるもの墓と思われる遺構はなく、ピットのひとつが墓塚を切る。長軸1.85m、短軸1.12m、深さ0.32mの隅丸方形気味の墓塚内に、長軸1.65m、短軸0.65mの木棺を据えた痕跡が確認された。木棺の主軸方位はN-47°-Eを指し、釘が両側の小口付近で検出されている。小口の幅は、南側が0.45mであるのに対して、北側は若干広く0.6mであるので、北枕にして埋葬されたものと思われる。被葬者の左肩にあたる部分からは、棺内に副葬された龍泉窯系青磁碗2点、同安窯系青磁皿4点の計6点の中国製の青磁が出土した。大きく2つに分けて置かれており、青磁碗1に接して青磁皿3、青磁碗2の周囲に青磁皿4, 5, 6が並べられていた。碗同士の距離は0.15mである。埋土内からは埋め戻しの後に標石として置かれていたと思われる5つの石が検出されているが、青磁碗1の口縁部の破片が北から2番目の標石の下から出土しているので、青磁碗が棺内で割れた段階では棺内にはある程度の空間が保たれていた模様である。



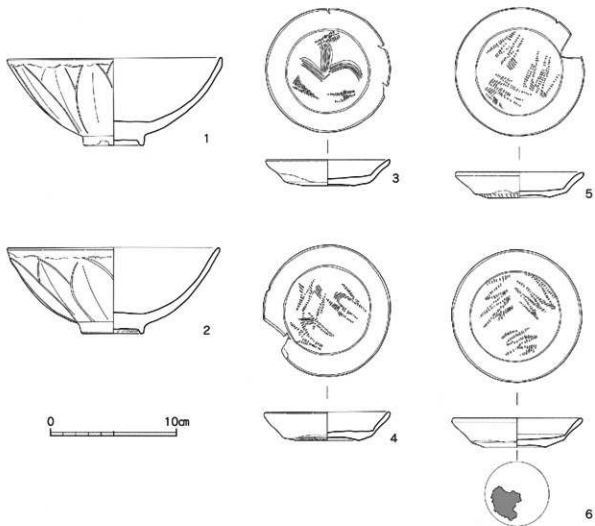
第10図 木棺墓実測図(縮尺1/20)

1, 2は龍泉窯系の青磁碗Ⅱ-b類である。

1は口径17.0cm、器高7.0cm、高台径4.8~4.9cmを測る。体部外面に鎗蓮弁文が施される。典型的なⅡ類よりも高台径が小さく、高台の幅も細い。プロポーション的にはⅢ類に類似する要素も見られるが、釉調や釉の掛け方にⅢ類的要素は見られない。釉はオリーブ灰色(2.5GY 6/1)を呈し透明感がなく、体部上半部の凡そ半分には僅かに黄色味がかり、細かな貫入が入る。高台底部の抉りは小さく、この部分に釉は掛けられない。

2は口径16.8cm、器高6.9cm、高台径5.0cmを測る。1と同様に高台径が小さく幅も細い。体部外面に鎗蓮弁文が施される。蓮弁の数は15弁であり1と同数であるが幅が広く、最も広い部分では3.5cmの幅があるものもある。釉は透明感のあるオリーブ灰色(2.5GY 6/1)を呈し、高台部の内側は露胎であるが、高台部の畳付けは施釉される。また全体的に貫入が多く入り、口縁端部を中心とする内外面に灰を被った痕が白く残る。

3~6は同安窯系青磁皿Ⅰ-1b類である。



第11図 木棺墓出土遺物実測図(縮尺1/3)

3は口径9.8～10.0cm、器高2.1cm、底径4.0cmを測る。施軸部分は全体的には透明感のあるオリーブ灰色(2.5GY 6/1)暗を呈するが、斑状に発色が悪く黄色味を帯びた部分がありその部分には細かな貫入が入る。内面の全体と外面体部上半部周辺に施軸され、内面には篋状工具による草文様と櫛状工具によるジグザグ状の文様が施される。

4は口径10.1cm、器高2.3cm、底径5.0cmを測る。軸はあまり透明感のないオリーブ灰色(5GY 6/1)を呈し白色の小さな粒を含み、内面の全体と外面体部上半部周辺に施軸される。また、内外面ともに軸を弾き露胎となる部分が散見され、外面には灰の粒が融着する部分がある。内面には櫛状工具によるジグザグ状の文様が施される。

5は口径10.3cm、器高2.1cm、底径5.0cmを測る。軸は透明感のあるオリーブ灰色(2.5GY 6/1)を呈し、内面の全体と外面体部上半部周辺に施軸される。内面には櫛状工具によるジグザグ状の文様が施される。

6は口径10.4cm、器高2.4cm、底径4.9cmを測る。軸はやや透明感のないオリーブ灰色(2.5GY 6/1)を呈し、内面全体と外面体部上半部に施軸される。外面底部には、黒色の融着物がある。内面には櫛状工具によるジグザグ状の文様が施される。

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第12図)

調査区のほぼ中央に位置する。遺構検出面の標高は17.19～16.83mで東南部に段差がある。柱穴は部分的に欠落するが、5×2間の総柱の身舎で、東西両面に庇または縁がある南北方向の掘立柱建物跡である。身舎は南北10.34m、東西4.38m、庇を含めると東西6.66mを測る。中軸線の方位はN-36°-Eを示す。建物の東側と南側はピット等の密度が低く、広場な空間利用がなされていたものと思われる。遺物の出土は殆ど全ての柱穴からあるが、図示できるものは僅かである。

P-1(№170遺構)は長軸0.27m、短軸0.22m、深さ0.36m(底面標高16.47m)を測り、土師器小皿、土師質甕、炉壁状の焼土塊の小片が出土がある。

P-2(№171遺構)は長軸0.44m、短軸0.33m、深さ0.27m(底面標高16.59m)を測る。黒色土器B類、土師器小皿、土師質甕の小片の出土がある。

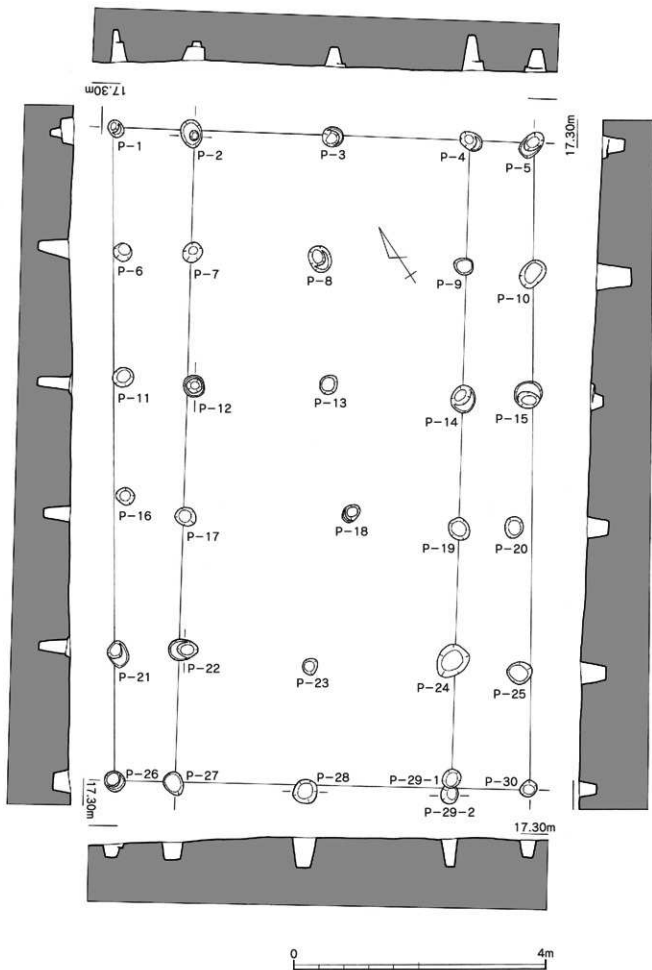
P-3(№180遺構)は長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.31m(底面標高16.56m)を測る。土師器小皿の小片が出土する。

P-4(№177遺構)は長軸0.34m、短軸0.28m、深さ0.57m(底面標高16.30m)を測る。土師器小皿などの小片が出土する。

P-5(№178遺構)は長軸0.44m、短軸0.31m、深さ0.36m(底面標高16.53m)を測る。土師器小皿(第17図-1)、陶器盤(第17図-7)が出土する。

P-6(№167遺構)は長軸0.30m、短軸0.28m、深さ0.39m(底面標高16.44m)を測り、同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類、黒色土器B類の小片が出土する。

P-7(№166遺構)は長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.51m(底面標高16.32m)を測り、土師器小皿(回転糸切り)などの小片の出土がある。



第12図 1号据立柱建物跡実測図(縮尺1/60)

P-8(№175遺構)は長軸0.43m、短軸0.32m、深さ0.40m(底面標高16.48m)を測る。土師器杯、土師器小皿、土師質杯蓋などの小片の出土がある。

P-9(№148・№1021遺構)は長軸0.31m、短軸0.27m、深さ0.47m(底面標高16.42m)を測る。土師器小皿(第17図-2)が出土する。

P-10(№147遺構)は長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.52m(底面標高16.75m)を測り、白磁碗Ⅳ類(第17図-5)、同安窯系青磁皿Ⅲ類(第17図-6)が出土する。

P-11(№161遺構)は長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.29m(底面標高16.57m)を測り、土師器杯、須恵器、鉄滓などの小片の出土がある。

P-12は長軸0.35m、短軸0.33m、深さ0.55m(底面標高16.36m)を測る。出土物はない。

P-13(№1025遺構)は長軸0.31m、短軸0.28m、深さ0.26m(底面標高16.63m)を測り、土師質甕などの小片の出土がある。

P-14(№144遺構)は長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.56m(底面標高16.37m)を測る。白磁小皿、瓦器碗、土師器碗などの小片の出土がある。

P-15(№145遺構)は長軸0.44m、短軸0.41m、深さ0.22m(底面標高16.75m)を測る。瓦器碗の出土がある。

P-16は長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.53m(底面標高16.38m)を測る。出土物はない。

P-17(№153遺構)は長軸0.34m、短軸0.27m、深さ0.42m(底面標高16.50m)を測り、須恵質瓦、朝鮮系無軸陶器、土師器、鉄滓の小片の出土がある。

P-18(№151遺構)は長軸0.31m、短軸0.25m、深さ0.33m(底面標高16.63m)を測る。弥生土器甕、龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類、土師器小皿の小片が出土する。

P-19(№140遺構)は長軸0.38m、0.32m、深さ0.55m(底面標高16.45m)を測る。同安窯系青磁皿、白磁碗、土師器小皿(回転糸切り)の小片が出土する。

P-20(№142遺構)は長軸0.31m、短軸0.30m、深さ0.33m(底面標高16.76m)を測り、土師器小片が出土する。

P-21は長軸0.38m、短軸0.31m、深さ0.25m(底面標高16.68m)を測る。出土物はない。

P-22(№132遺構)は長軸0.48m、短軸0.35m、深さ0.49m(底面標高16.58m)を測り、土師器小皿、瓦器碗の小片の出土がある。

P-23は長軸0.27m、短軸0.24m、深さ0.44m(底面標高16.58m)を測る。出土物はない。

P-24(№137遺構)は長軸0.56m、短軸0.47m、深さ0.72m(底面標高16.45m)を測る。布目瓦(第17図-8)、白磁、瓦器碗、須恵器杯、土師器杯の小片の出土がある。

P-25は長軸0.37m、短軸0.32m、深さ0.42m(底面標高16.78m)を測る。出土物はない。

P-26(№119遺構)は長軸0.31m、短軸0.30m、深さ0.18m(底面標高16.79m)を測る。土師器小皿、青磁碗の小片の出土がある。

P-27(№118遺構)は長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.28m(底面標高16.76m)を測る。土師器杯、土師質蓋杯の小片の出土がある。

P-28(№116遺構)は長軸0.39m、短軸0.36m、深さ0.50m(底面標高16.67m)を測る。土師器杯、瓦器碗、同安窯系青磁碗の小片の出土がある。

P-29-1(№131遺構)は長軸0.30m、短軸0.29m、深さ0.28m(底面標高16.91m)を測る。須恵

器、白磁碗の小片の出土がある。

P-29-2は、長軸0.30m以上、短軸0.26m、深さ0.47m(底面標高16.90m)を測る。出土遺物はない。

P-30(№197遺構)は長軸0.25m、短軸0.24m、深さ0.29m(底面標高16.90m)を測り、土師器小皿、須恵器、鉄滓の出土がある。

2号掘立柱建物跡(第13図)

調査区の北端部に位置する。南北方向の掘立柱建物跡であり、北端部を削平により失う。6以上×2間の側柱の身舎で、南北11.55m、東西4.50mを測る。中軸線の方位はN-25.5°-Eを示す。

P-1は(№989遺構)は長軸0.32m、短軸0.25m、深さ0.42m(底面標高16.34m)を測る。土師器杯などの小片の出土がある。

P-2(№918遺構)は長軸0.39m、短軸0.35m、深さ0.35m(底面標高16.50m)を測る。

P-3(№988遺構)は長軸0.27m、短軸0.24m、深さ0.40m(底面標高16.44m)を測る。黒色土器B類椀、瓦器碗、土師器杯の小片の出土がある。

P-4(№923遺構)は長軸0.29m、短軸0.27m、深さ0.26m(底面標高16.65m)を測る。土師器小片が出土する。

P-5(№993遺構)は長軸0.29m、短軸0.28m、深さ0.32m(底面標高16.59m)を測る。瓦器碗(第17図-3)、土師器小皿の小片の出土がある。

P-6(№957遺構)は長軸0.30m、短軸0.28m、深さ0.27m(底面標高16.66m)を測る。土師器碗、須恵器の小片の出土がある。

P-7(№979遺構)は長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.37m(底面標高16.58m)を測る。滑石製石鍋片が出土する。

P-8(№953遺構)は径0.30m、深さ0.18m(底面標高16.76m)を測る。土師器碗の小片の出土がある。

P-9(№999遺構)は径0.32m、深さ0.36m(底面標高16.55m)を測る。須恵器杯蓋(7世紀前半)、土師器杯、鉄滓などの小片の出土がある。

P-10(№964遺構)は長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.44m(底面標高16.59m)を測る。還元炎焼成陶器の高台部、黒色土器B類椀、土師器などの小片の出土がある。

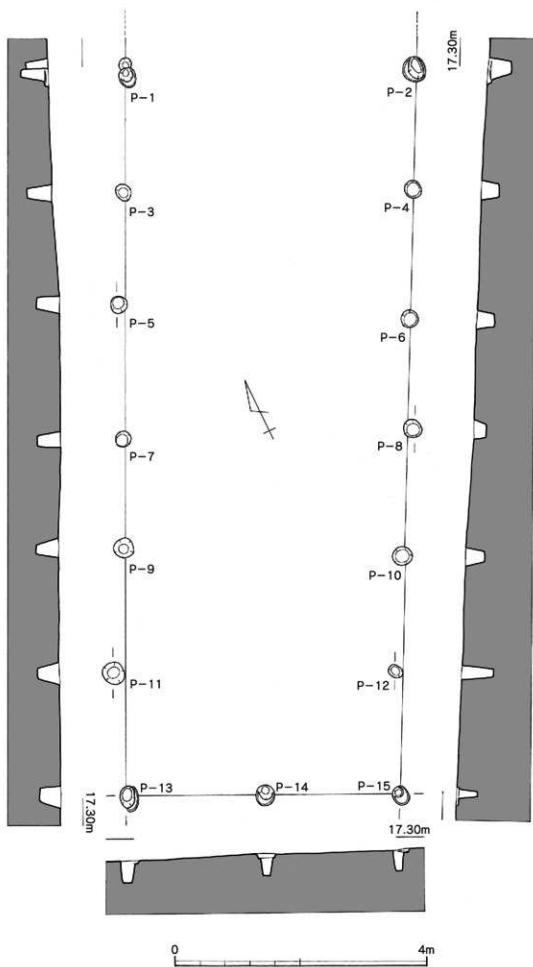
P-11(№1006遺構)は長軸0.35m、短軸0.34m、深さ0.31m(底面標高16.58m)を測る。瓦器碗、須恵器杯、鉄滓などの小片が出土する。

P-12は、長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.52m(底面標高16.56m)を測る。出土遺物はない。

P-13は長軸0.41m、短軸0.28m、深さ0.33m(底面標高16.62m)を測る。出土遺物はない。

P-14は長軸0.33m、短軸0.29m、深さ0.34m(底面標高16.69m)を測る。出土遺物はない。

P-15(№1003遺構)は長軸0.32m、短軸0.26m、深さ0.32m(底面標高16.80m)を測る。須恵器、土師器の小片の出土がある。



第13图 2号独立柱建筑物勘察测图(缩尺1/60)

3号掘立柱建物跡(第14図)

調査区の北端部、2号掘立柱建物跡の東側に並列する南北方向の掘立柱建物跡である。北端部を削平により失い、3以上×2間の側柱の身舎で、南北6.73m、東西3.99mを測る。2号掘立柱建物との同時性は無く、構造が似通っており、建替えられたものだと考えられる。中軸線の方位はN-28.5°-Eを示す。

P-1(№916遺構)は長軸0.34m、短軸0.29m、深さ0.31m(底面標高16.55m)を測る。須恵質の瓦等の小片の出土がある。

P-2は長軸0.22m、短軸0.19m、深さ0.14m(底面標高16.87m)を測る。出土遺物はない。

P-3(№924遺構)は長軸0.27m、短軸0.23m、深さ0.32m(底面標高は16.60m)を測る。瓦器碗(第17図-4)、須恵質の布目瓦、土師器杯などの小片の出土がある。

P-4(№927遺構)は長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.36m(底面標高16.79m)を測る。

P-5(№959遺構)は長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.39m(底面標高16.57m)を測る。土師器杯、須恵質の布目瓦が出土する。

P-6は長軸0.32m、短軸0.29m、深さ0.25m(底面標高16.87m)を測る。出土遺物はない。

P-7(№952遺構)は長軸0.27m、短軸0.19m、深さ0.26m(底面標高16.75m)を測る。

P-8(№948遺構)は長軸0.27m、短軸0.23m、深さ0.46m(底面標高16.73m)を測る。須恵器杯、土師器杯の出土がある。

P-9は径0.21m、深さ0.59m(底面標高16.58m)を測る。出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡(第15図)

調査区の北端部、2号掘立柱建物跡の西側に位置する掘立柱建物跡である。2×1間の側柱の身舎で、東辺3.72m、南辺2.52m、西辺3.57m、北辺2.46mを測る。中軸線の方位はN-28°-Eを示す。

P-1は径0.33m、深さ0.37m(底面標高15.48m)を測る。出土遺物はない。

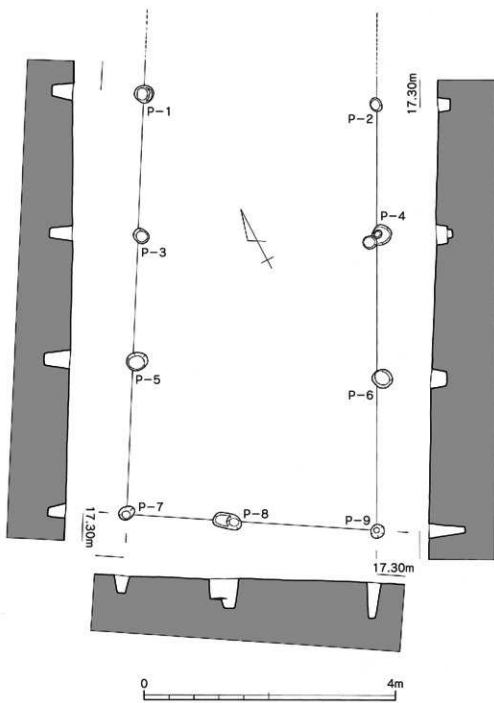
P-2(№991遺構)は長軸0.33m、短軸0.31m、深さ0.43m(底面標高15.40m)を測る。土師質の瓦、須恵質の瓦、土師器杯の小片が出土する。

P-3(№982遺構)は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.51m(底面標高15.36m)を測る。土師器杯、鉄滓等の小片の出土がある。

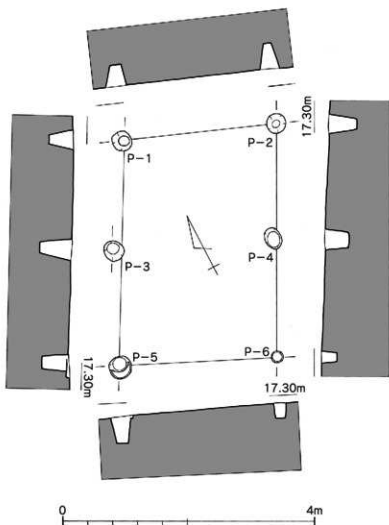
P-4(№992遺構)は長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.38m(底面標高15.54m)を測る。土師器杯等の小片の出土がある。

P-5(№981遺構)は長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.42m(底面標高15.48m)を測る。土師質の宝珠つまみ、杯蓋(8世紀末)、土師器小皿、須恵器等の小片の出土がある。

P-6(№978遺構)は長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.22m(底面標高15.74m)を測る。土師質の杯蓋(8世紀末)等の小片の出土がある。



第14图 3号掘立柱建物跡实测图(縮尺1/60)



第15図 4号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)

5号掘立柱建物跡(第16図)

調査区の北部に位置する掘立柱建物跡である。2×2間の総柱の身舎で4.26×3.65mを測り、長軸方向はN-32°-Wを示す。

P-1は、長軸0.27m、短軸0.24m、深さ0.25m(底面標高15.95m)を測る。出土遺物はない。

P-2(№1036遺構)は、長軸0.21m、短軸0.20m、深さ0.19m(底面標高15.93m)を測る。土師器の杯の小片が出土する。

P-3は、長軸0.23m、短軸0.20m、深さ0.19m(底面標高15.97m)を測る。出土遺物はない。

P-4は、長軸0.23m、短軸0.20m、深さ0.22m(底面標高16.04m)を測る。出土遺物はない。

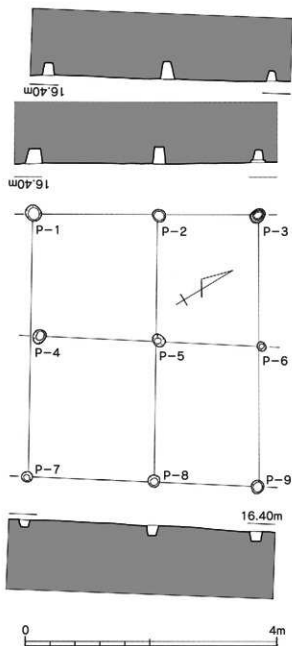
P-5は、長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.35m(底面標高15.89m)を測る。出土遺物はない。

P-6は、長軸0.17m、短軸0.14m、深さ0.19m(底面標高16.03m)を測る。出土遺物はない。

P-7は、径0.17m、深さ0.12m(底面標高16.19m)を測る。出土遺物はない。

P-8は、長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.14m(底面標高16.16m)を測る。出土遺物はない。

P-9は、長軸0.21m、短軸0.19m、深さ0.16m(底面標高16.12m)を測る。出土遺物はない。



第16図 5号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60)

掘立柱建物跡出土遺物(第17図)

1は1号掘立柱建物跡の柱穴P-5(No.178遺構)から出土した土師器の小皿である。口径9.0cm、底径7.2cm、器高1.2cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りによる。器表の色調は橙色(7.5YR 6/6)を呈し、胎土には1mm以下の小砂粒と雲母粒を多量に含む。

2は1号掘立柱建物跡の柱穴P-9(No.148・1021遺構)から出土した土師器の小皿である。口径9.0cm、底径6.2cm、器高1.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りによる。器表の色調は明赤褐色(5YR 5/6)を呈すが、部分的ににぶい黄色(2.5Y 6/3)を呈す部分もある。胎土には1mm以下の小砂粒と雲母粒を多量に含む。

3は2号掘立柱建物跡の柱穴P-5(No.993遺構)から出土した瓦器碗である。口径は15.2cmに復元される。器表の色調は灰色(5Y 5/1)を呈する。胎土に不純物は殆ど含まれない。

4は3号掘立柱建物跡の柱穴P-3(No.924遺構)から出土した瓦器碗である。高台径は9.4cmを測る。器表の色調は、体部内面は灰白色(5Y 8/1)を呈し、器表外面には炭素の吸着が部分的に残る。

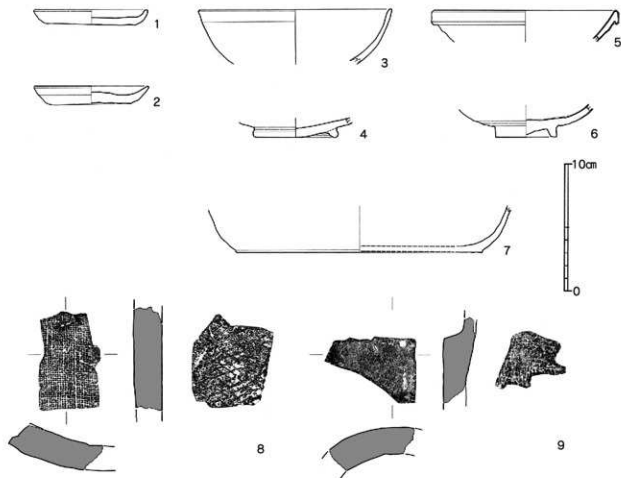
5は1号掘立柱建物跡の柱穴P-10(No.147遺構)から出土した白磁碗Ⅳ類である。口径は14.7cmに復元される。

6は1号掘立柱建物跡の柱穴P-10(No.147遺構)から出土した同安窯系青磁皿Ⅲ類である。高台径は4.9cmに復元される。

7は1号掘立柱建物跡の柱穴P-5(No.178遺構)から出土した陶器の盤である。底径は19.2cmに復元される。内面には黄緑色の軸が掛けられるが、なじみが悪く小さな剝離が多数見られる。外面は露胎である。胎土には白色の小砂粒を多量に含む。

8は1号掘立柱建物跡の柱穴P-24(No.137遺構)から出土した須恵質の平瓦である。凹面には布目痕、凸面には斜格子状のタタキ痕が残る。布目の糸の間隔は1cm幅内に7本、格子の間隔は5~6mmである。胎土には1mm程度の砂粒をやや多く含む。

9は3号掘立柱建物跡の柱穴P-3(No.924遺構)から出土した須恵質の丸瓦である。凹面には布目痕が残る。布目は粗く、糸の間隔は1cm幅内に4本である。胎土には白色及び黒色の微細粒を多く含み、2mm程度の白色の砂粒を含む。



第17図 掘立柱建物跡出土遺物実測図(縮尺1/3)

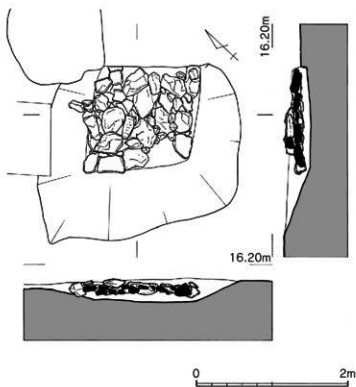
方形石組遺構(第18図)

調査区の北西隅に位置する。2.25×2.65m、深さ0.3mの方形の掘り込みの中に、1.35×1.45mの方形の範囲に拳大から人頭大の石を組んだ遺構である。北西側の一部を試掘トレンチで失い、北角を他の土坑に切られる。石組の下からは遺構は検出されていない。

出土遺物(第20図)

1は方形石組遺構の埋土から出土した須恵器の瓶の底部付近である。残存高7.4cm、底径7.2cmを測る。胴部には2条の沈線が巡る。

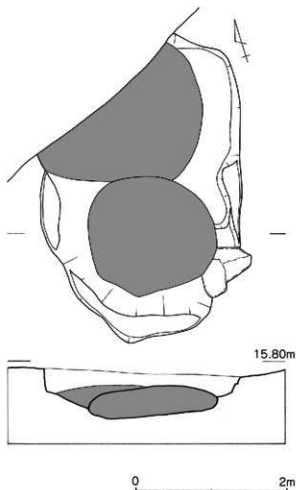
2は方形石組遺構の埋土から出土した須恵質の鉢である。口径は19.0cmに復元される。東播系であろう。



第18図 方形石組遺構実測図(縮尺1/50)

円形石組遺構(第19図)

調査区の北西部、北側湿地帯の中で検出された遺構である。北部が調査区外に延びる長軸4.0m以上、短軸2.7m、深さ0.55mの楕円形の土坑の中に、拳大から人頭大の石が円形を呈して検出された。円形石組遺構としてはいるが、石は組むというよりも、投げ込まれたような状態であった。1/10の実測図の所在が不明であったため、1/20の実測図を使用した。よって石組は、その範囲のみしか図示できていない。



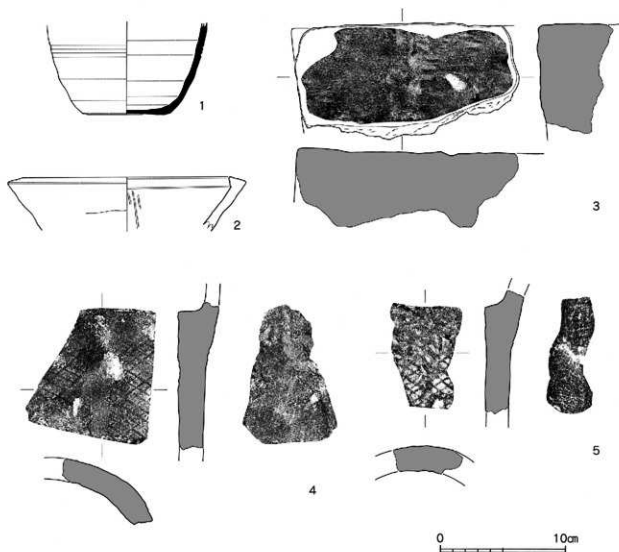
第19図 円形石組遺構実測図(縮尺1/50)

出土遺物(第20図)

3は円形石組遺構の埋土から出土した土製品である。残存長はタテ9.0cm、ヨコ17.7cm、厚さ6.0cmを測る。胎土には1mm前後の白色の砂粒を含み、スサ状のものを混入した痕跡があるが緻密である。表面の色調は橙色(5YR 7/6)、内面にはぶい橙色(5YR 7/4)或いは灰褐色(7.5YR 6/2)を呈す。

4は円形石組遺構の埋土から出土した丸瓦である。凸面には斜格子状のタタキ痕、凹面には布目が残る。色調は灰色を呈し、胎土には3mm前後のやや大粒の白色の砂粒を含む。格子目の間隔は5~15mm、布目の糸の間隔は4本/cmである。

5は円形石組遺構の埋土から出土した丸瓦である。凸面には斜格子状のタタキ痕、凹面には布目が残る。格子目の間隔は5~7mm、布目の糸の間隔は5本/cmである。胎土には1~3mmの白色砂粒を含む。焼成はやや軟質であり、表面の色調は灰色、内面は淡く橙色を帯びる。



第20図 石組遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

その他の遺構(第21・22図)

SK-1(№326遺構)は、調査区中央部から東南に約22mの地点に位置する。長軸1.42m、短軸0.67m、深さ0.21mの楕円形を呈する。須恵器、黒色土器B類、白磁等の小片が出土する。

SK-2(№708遺構)は調査区中央部から東に約25mの地点に位置する。長軸1.87m、短軸0.54m、深さ0.22mの楕円形を呈する。弥生土器(中期)、須恵器の小片が出土する。

SK-3(№874遺構)は調査区中央部から西に約20mの地点に位置する。長軸1.02m、短軸0.77m、深さ0.10mの長方形を呈する。

SK-4(№857遺構)は調査区中央部から西に約17mの地点に位置する。長軸0.97m、短軸0.86m、深さ0.46mの円形を呈する。

SK-5(№784遺構)は調査区中央部から北に約10mの地点に位置する。長軸は削平されるが1.63m以上、短軸1.43m、深さ0.10mの楕円形を呈する。

SK-6(№875遺構)は調査区中央部から西に約20mの地点に位置する。長軸1.97m、短軸1.41m、深さ0.06mの楕円形の浅い土坑に、長軸1.15m、短軸1.06m、深さ0.82mの円形の土坑が掘り込まれる。白磁椀V類、VI-1a類、Ⅷ類、龍泉窯系青磁杯Ⅲ類などの小片が出土する。

SK-7(№1057遺構)は調査区中央部から南西に約18mの地点に位置する。長軸1.24m、短軸0.92m、深さ0.07mの長方形を呈する。瓦器椀、土師器高台付杯の小片、高麗青磁の鉢(第25図-40)の出土がある。

SK-8(№870遺構)は調査区中央部から西南西に約23mの地点に位置する。長軸1.50m、短軸1.18m、深さ0.07mの楕円形を呈する。須恵器杯蓋つまみ、瓦器椀、土師器杯などの小片が出土する。

SK-9(№1063遺構)は調査区中央部から北西に約30mの地点に位置する。長軸1.14m、短軸1.08m、深さ0.20mの円形を呈する。須恵器、瓦器椀、滑石、鉄滓、同安窯系青磁椀などの小片が出土する。

SK-10(№1064遺構)は調査区中央部から北西に約29mの地点に位置する。長軸0.99m、短軸0.92m、深さ0.14mの円形を呈する。滑石製硯(第30図-71)、須恵器、黒色土器A類椀、白磁、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類、鉄滓などの小片が出土する。

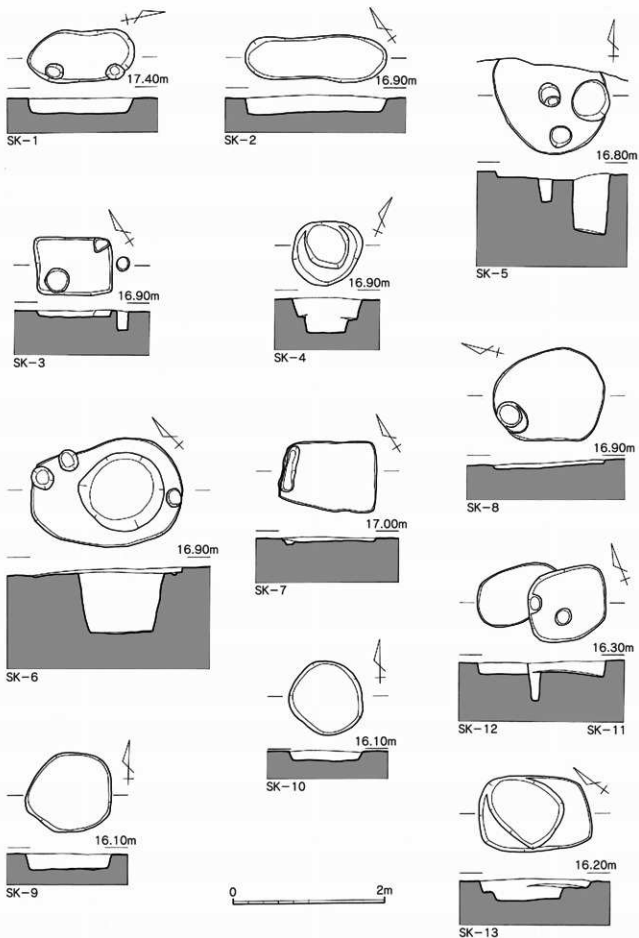
SK-11(№1053遺構)は調査区中央部から北東に約34mの地点に位置する。長軸1.05m、短軸0.95m、深さ0.21mの楕円形を呈する。SK-12を切る。須恵器杯蓋、土師器椀、布目瓦、白磁椀Ⅳ類などの小片が出土する。

SK-12(№1054遺構)は、長軸1.07m以上、短軸0.72m、深さ0.16mの楕円形を呈する。土坑11に切られる。瓦器椀、布目瓦、釘状鉄製品などの小片が出土する。

SK-13(№1060遺構)は調査区中央部から北北西に約18mの地点に位置する。長軸1.46m、短軸1.00m、深さ0.30mの方形を呈する。

SK-14(№1136遺構)は調査区中央部から西に約32mの地点に位置する。長軸1.13m、短軸1.11m、深さ0.48mの円形を呈する。

SK-15(№1074遺構)は調査区中央部から北西に約23mの地点に位置する。長軸0.99m、短軸0.95m、深さ0.30mの不整形を呈する。SK-16を切る。土師質杯蓋(7世紀後半)、須恵器杯蓋(7世紀後半)、土師器杯(第23図-8)、鉄滓などの小片が出土する。



第21図 その他の遺構実測図・1(縮尺1/50)

SK-16(No.1075遺構)は径0.8m、深さ0.24mの円形を呈する。須恵器片の出土がある。

SK-17(No.1210遺構)は調査区中央部から北北東に約15mの地点に位置する。長軸1.04m、短軸0.71m、深さ0.25mの楕円形を呈する。土坑18を切る。瓦器椀、瓦、土師器小皿(回転糸切り)、鉄滓などの小片が出土する。

SK-18はSK-17に切られ、長軸0.90m、深さ0.04mの楕円形を呈する。出土遺物はない。

SK-19は調査区中央部から北北西に約15mの地点に位置する。長軸1.08m、短軸0.99m、深さ0.72mの不整形を呈する。出土遺物はない。

SK-20は調査区中央部から西南に約8mの地点に位置する。長軸1.59m、短軸0.90m、深さ0.42mの楕円形を呈する。出土遺物はない。

SK-21は調査区中央部から北に約20mの地点に位置する。長軸1.18m、短軸0.87m、深さ0.38mの楕円形を呈する。出土遺物はない。

SK-22はSK-20の東約2.5mに位置する。長軸2.00m、短軸1.09m、深さ0.46mの楕円形を呈する。出土遺物はない。

SK-23は調査区中央部から南西に約41mの地点に位置する。長軸2.79m、短軸1.11m、深さ0.03mの不整形楕円形を呈する。出土遺物はない。

SK-24は調査区中央部から北西に約3mの地点に位置する。長軸3.97m、短軸1.26m、深さ0.22mの長方形を呈する。出土遺物はない。

No.206遺構は埋甕遺構の南西約1.5mの地点に位置する。径0.7m、深さ0.32mを測る。黒色土器A類(第23図-10)の出土がある。

No.392遺構は調査区中央部から東南東約24mの地点に位置するピットである。径0.18~0.19m、深さ0.19mを測る。鍋型煮沸具(第23図-16)の出土がある。

No.433遺構はNo.392遺構の東南東約7.5mの地点に位置するピットである。径0.32~0.34m、深さ0.46mを測る。龍泉窯系青磁小椀(第25図-31)の出土がある。

No.476遺構は木棺墓の東約8mの地点に位置するピットである。径0.22~0.233m、深さ0.31mを測る。鍋型煮沸具(第23図-15)の出土がある。

No.735遺構は調査区中央部から北東に約14mの地点に位置するピットである。径0.36~0.42m、深さ0.36mを測る。土師器の小皿(第23図-2・5・6)の出土がある。

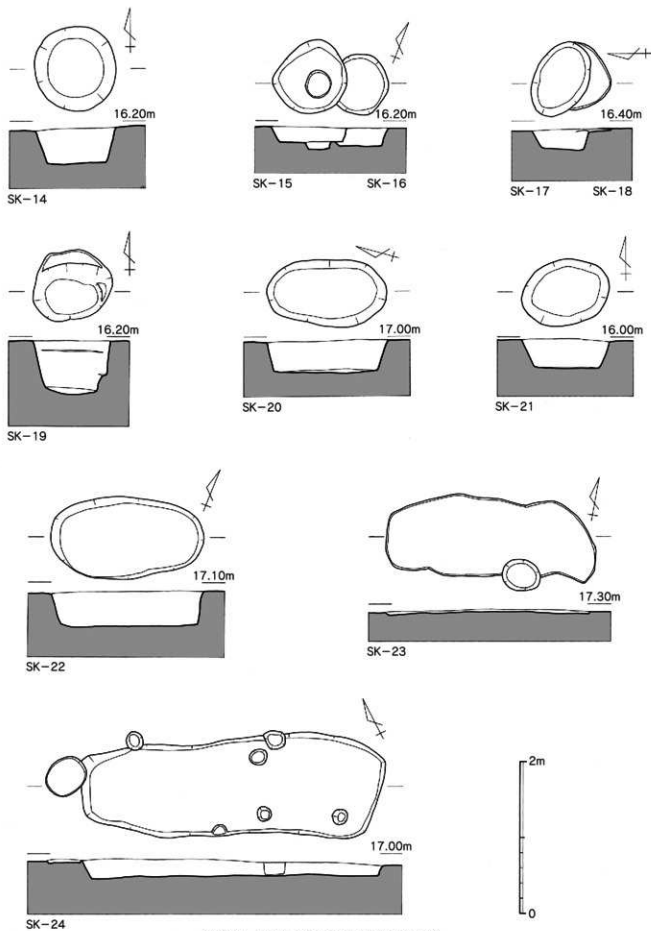
No.786遺構は調査区中央部から北北西に約8mの地点に位置するピットである。径0.24~0.26m、深さ0.36mを測る。土鍾(第27図-55)の出土がある。

No.837遺構はSK-4の北1.5mの地点に位置するピットである。径0.44~0.54m、深さ0.56mを測る。土師器の椀(第23図-9)の出土がある。

No.855遺構は、No.786遺構の西2.6mの地点に位置するピットである。径0.40m~0.44m、深さ0.38mを測る。越州窯系青磁椀(第23図-18)の出土がある。

No.1055遺構は調査区の北端部付近に位置するピットである。径0.34m~0.36m、深さ0.33mを測る。土師器の小皿(第23図-1)の出土がある。

No.1058遺構はSK-7の北0.29mに位置するピットである。径0.26~0.30m、深さ0.20mを測る。棒状土製品(第27図-56)の出土がある。



第22図 その他の遺構実測図・2(縮尺1/50)

土師器の小皿(第23図-7)の出土がある。

№1165遺構は調査区中央部から北北西に約35mの地点に位置するピットである。径0.28～0.30m、深さ0.38mを測る。瓦器椀(第23図-13)の出土がある。

№1166遺構は調査区中央部から西に約36mの地点に位置するピットである。径0.34～0.38m、深さ0.47mを測る。瓦器椀(第23図-14)の出土がある。

№1202遺構はSK-3の北2.5mに位置するピットである。径0.20～0.28m、深さ0.67mを測る。土師器の小皿(第23図-3)の出土がある。

その他の遺構出土遺物(第23～31図)

1は№1055遺構から出土した土師器の小皿である。口径8.5cm、底径6.7cm、器高1.6cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。底部には板目状圧痕が残る。器表の色調は灰白色(7.5YR 8/2)を呈し、胎土には1mm以下の小砂粒を多く含む。器表には部分的に赤褐色の顔料が塗布されていた痕跡が残る。

2は№735遺構から出土した土師器の小皿である。口径8.5cm、底径7.0cm、器高1.0～1.3cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。器表の色調はにぶい黄橙色(10YR 7/3)を呈し、胎土には白色の砂粒と雲母の細粒を僅かに含むが、手触りはとても滑らかである。

3は№1202遺構から出土した土師器の小皿である。口径8.6cm、底径6.9cm、器高1.0cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。

4はSX-2(№538遺構)から出土した土師器の小皿である。口径8.7cm、底径6.1cm、器高1.0～1.2cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りによる。器表の色調は赤褐色(5YR 4/6)を呈し、1mm以下の小砂粒及び雲母をやや多く含む。

5は№735遺構から出土した土師器の小皿である。口径8.6cm、底径6.3cm、器高1.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りによる。底部は分厚く7mm程度ある。器表の色調はにぶい黄橙色(10YR 7/4)を呈する。胎土には白色の微細粒を僅かに含むが、手触りは滑らかである。

6は№735遺構から出土した土師器の小皿である。口径8.7cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。器表の色調は浅黄橙色(7.5YR 8/3)を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を少量含む。

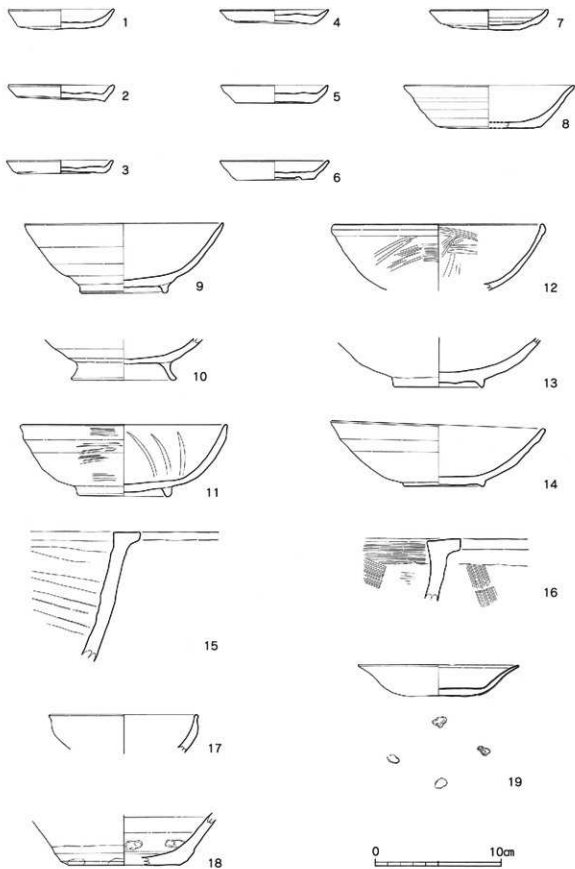
7は№1059遺構から出土した土師器の小皿である。口径9.5cm、底径5.5cm、器高1.6cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りによる。底部には板目状圧痕が残る。器表の色調はにぶい橙色(7.5YR 7/4)を呈し、胎土には白色及び赤色の微細粒、雲母の微細粒を少量含む。

8はSK-15(№1074遺構)から出土した土師器の杯である。復元口径13.6cm、器高3.4cm、復元底径7.0cmを測る。器表の色調は橙色(7.5YR 6/6)を呈し、胎土には白色と赤色の細粒を含む。

9は№837遺構から出土した土師器の椀である。復元口径15.7cm、高台径7.2cm、器高5.6cmを測る。器表の色調は浅黄橙色(7.5YR 8/3)を呈し、胎土には1mm以下の砂粒をやや多く含む。

10は№206遺構から出土した黒色土器A類の高台付き椀である。復元高台径8.4cmを測る。外面の色調はにぶい橙色(7.5YR 7/4)、内面は炭素が吸着し暗黒色を呈する。

11は西側湿地帯の中央部付近から出土した瓦器の椀である。口径16.4cm、高台径7.5cm、器高5.7cmを測る。内面はコテ当ての後にナデが施される。



第23図 その他の遺構出土遺物実測図・1(縮尺1/3)

12は西側湿地帯から出土した瓦器の椀である。復元口径は16.8cmを測る。内外面にはへら状工具による研磨痕が残される。

13はNo.1165遺構から出土した瓦器の椀である。高台径7.2cmを測る。器表の色調は灰色(5Y 6/1)を呈し、炭素の吸着は体部内面の一部等に薄く確認できるのみである。胎土には1~2mm程度の白色の砂粒が少量含まれる。

14はNo.1166遺構から出土した瓦器の椀である。口径17.1cm、高台径6.5cm、器高4.6~5.2cmを測る。体部に貼付けられる高台は低く、断面は逆三角形形状を呈する。器表の炭素の吸着には重ね焼き等によりムラがあり、吸着が見られない部分は灰白色(2.5Y 7/1)を呈する。胎土には砂の微細粒を少量含む。

15はNo.476遺構から出土した銅型煮沸具である。口径は復元できなかったが、30cmを超えるものと思われる。器表の色調は被熱や煤の付着により変色しているが、本来は橙色(5YR 6/6)を呈していたものである。胎土には1mm程度の砂粒と雲母粒をやや多く含む。器面調整は、外面は丁寧にナデ消されるが、内面には粗いハケ目が残る。

16はNo.392遺構から出土した銅型煮沸具である。口径は復元できなかったが、大型である。器表の色調はぶい黄橙色(10YR 6/3)を呈し、外面の口縁部下2cmから下には煤が付着する。口縁部の上面と、体部内面にはハケ目が残る。

17は西側湿地帯から出土した黒釉陶器の椀である。復元口径11.8cmを測る。

18はNo.855遺構から出土した越州窯系青磁椀 1-5類である。底部は平底で、底径は8.8cmに復元される。軸は灰オリーブ色(7.5Y 6/2)を呈し、体部内面と、体部外面の底部付近まで施軸される。内底部及び外面の体部と底部の境目付近には目跡が残る。

19は西側湿地帯から出土した青磁である。皿として図示したが蓋であるかも知れない。龍泉窯系であろうか。復元口径12.8cm、器高2.5cmを測る。外底に目跡が残される。口縁部には浅い輪花が施されるが、残存部分には1ヶ所しか確認できないため、最大でも5ヶ所程度に施されていたものと考えられる。軸の色調はオリーブ灰色(2.5GY 6/1)を呈し全面に施軸される。

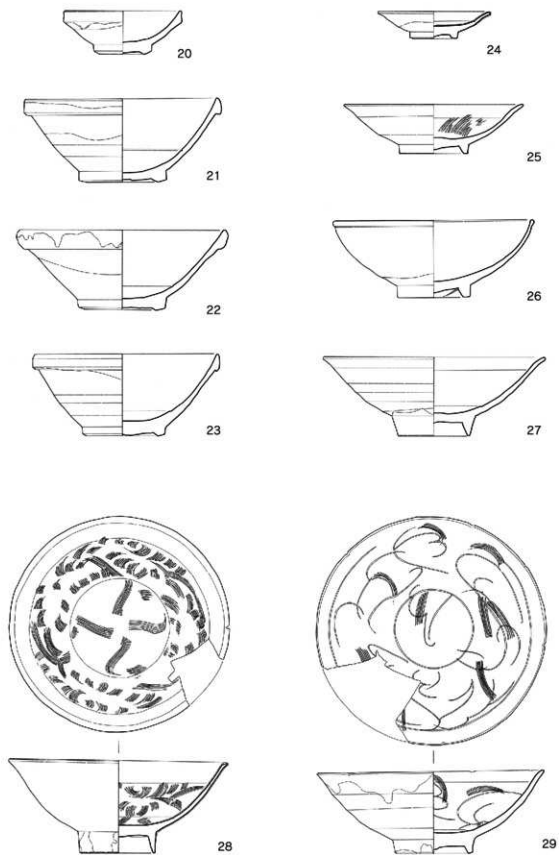
20は西側湿地帯の南寄りから出土した白磁皿II-1b類である。復元口径9.5cm、高台径4.7cm、器高3.5cmを測る。軸は僅かに灰オリーブ色(5Y 6/2)を呈し、体部内面の全体と体部外面の口縁部周辺に施軸される。体部外面下半部の露胎部分には黒色の有機物が付着する部分があるが、露胎部分は全体的に黒ずんでいるので、漆状のものが塗布されていた可能性もある。

21は西側湿地帯の中央部付近と南寄りの部分の別々の場所から出土したものが接合した白磁椀IV-1a類である。口径15.3cm、高台径7.0cm、器高6.7cmを測る。軸は透明感のない灰色(5Y 6/1)を呈し、体部内面の全体と体部外面の上半部に施軸される。

22は西側湿地帯の中央部付近から出土した白磁椀IV-1a類である。口径17.0cm、高台径7.0cm、器高6.4cmを測る。軸はやや黄色みがかかった透明感のない灰黄色(2.5Y 7/2)を呈し、内面全体と外面の上半部に施軸される。

23は西側湿地帯の試掘トレンチから出土した白磁椀IV-1a類である。口径14.6cm、高台径6.6cm、器高6.6cmを測る。軸は透明感のある灰白色(5Y 7/1)を呈し、体部内面の全体と体部外面の口縁部直下に施軸される。よって外面の大半は露胎である。

24は西側湿地帯の北寄りの地点から出土した白磁皿III-2類である。口径9.2cm、高台径3.9cm、



第24図 その他の遺構出土遺物実測図・2(縮尺1/3)

器高2.2cmを測る。軸は透明感のある灰色(7.5Y 7/1)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台際付近まで施軸される。

25は西側湿地帯の南寄りから出土した白磁椀Ⅵ-1b類である。復元口径14.4cm、高台径5.5cm、器高4.0cmを測る。体部内面には櫛状工具により文様が施文される。軸は透明感のある灰白色(5Y 7/2)を呈し、体部内面全体と体部外面の高台際まで施軸される。

26は北側湿地帯の中央部付近から出土した白磁椀Ⅱ-1類である。復元口径16.1cm、高台径5.9cm、器高6.2cmを測る。体部は内湾し、口縁部は小さな玉縁状を呈する。高台部内面には削り工具の痕跡が残る。軸はくすんだ灰白色(5Y 7/2)を呈し、体部内面全体と体部外面の3分の2程度に施軸される。また、露胎部分との境目はオレンジ色に発色する。

27は西側湿地帯の南寄りから出土した白磁椀Ⅴ-2a類である。復元口径17.8cm、高台径5.8cm、器高6.4cmを測る。軸は透明感のない灰白色(5Y 7/1)を呈し、体部内面全体と体部外面の高台際まで施軸される。

28は北側湿地帯から出土した白磁椀Ⅴ-4c類である。口径17.4cm、高台径6.0cm、器高7.3～7.5cmを測る。体部内面には、櫛状工具により細かい文様が施文される。軸はやや透明感のある灰オリーブ(5Y 6/2)色を呈し、体部の内面と外面の全体及び高台外面の畳付部付近まで施軸される。畳付部分に付着した軸は掻き取られる。

29は西側湿地帯の北寄りから出土した白磁椀Ⅶ-b類である。口径18.0cm、高台径6.2cm、器高6.5cmを測る。口縁部の6ヶ所に輪花が施されているが、その間隔は一定ではない。体部内面には櫛状工具及び篋状工具による草文花が施される。軸は灰白色(5Y 7/2)を呈し、外面全体に施軸した後、高台内部と畳み付け部を掻き取っている。

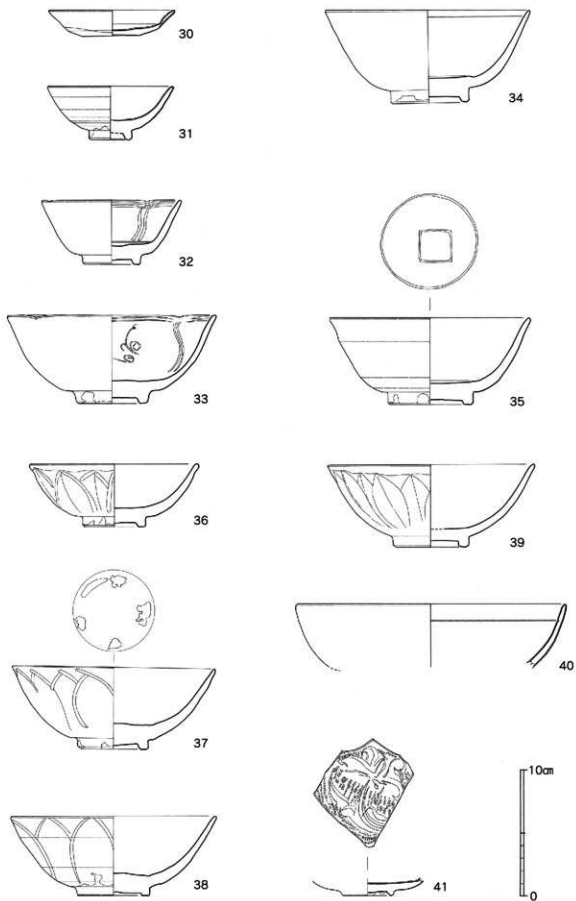
30は西側湿地帯の中央部付近から出土した同安窯系青磁皿Ⅲ-1a類である。口径10.0cm、底径4.5cm、器高1.6cmを測る。軸は灰オリーブ色(5Y 6/2)を呈し、体部内面の全体と体部外面上半部に施軸される。体部内面の軸は黄色味が強く、無数の貫入が入る。内外面ともに無文である。

31はNo433遺構から出土した龍泉窯系青磁小椀Ⅰ-1a類である。復元口径10.0cm、復元高台径3.4cm、器高4.3cmを測る。軸は透明感のある暗オリーブ(7.5Y 4/3)色を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台際まで施軸され、部分的には畳付部にまで及ぶ。

32は西側湿地帯の南寄りから出土した龍泉窯系青磁小椀Ⅰ-2類である。口径11.0cm、高台径4.6cm、器高5.1cmを測る。口縁部には残存部位では2ヶ所に輪花が施されており、本来は5ヶ所に施されていたものであろう。体部内面には二又の篋状工具により施文される。軸は非常に透明感のある緑灰色(7.5GY 6/1)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台部外側面にまで施軸される。

33は西側湿地帯から出土した龍泉窯系青磁椀Ⅰ-4b類である。復元口径16.4cm、高台径5.6cm、器高7.0cmを測る。残存部位では口縁部の2ヶ所に輪花が施されており、本来は5ヶ所に施されていたものである。体部内面は二又の篋状工具による施文により区画され、篋状工具による草文花が施される。軸は非常に透明感のある灰オリーブ色(7.5Y 6/2)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台部外側面にまで施軸され、無数の貫入が入る。

34は西側湿地帯の中央部付近から出土した龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1c類である。口径16.2cm、高台径6.2cm、器高7.4cmを測る。体部内底に文字印刻があるが判読不能である。軸は灰オリーブ色(5Y 5/3)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台部外側面にまで施軸される。



第25図 その他の遺構出土遺物実測図・3(縮尺1/3)

35は西側湿地帯の北寄りから出土した龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1c類である。口径15.8cm、高台径6.8cm、器高6.9cmを測る。体部内底には方形区画の印刻があるが内部の文字は判読不能である。軸は灰オリーブ色(7.5Y 5/2)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台畳付部にまで施軸される。

36は西側湿地帯の南寄りから出土した龍泉窯系青磁椀Ⅱ-b類である。口径13.3cm、高台径5.0cm、器高5.0cmを測る。軸は透明感のある灰オリーブ色(5Y 5/3)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台外側面に施軸され、一部は畳付部にも及ぶ。細かい貫入が全体的に入る。

37は西側湿地帯の中央部南寄りから出土した龍泉窯系青磁椀Ⅱ-b類である。口径16.0cm、高台径5.6cm、器高6.5cmを測る。体部外面の蓮弁文には鋸はあるもののあまり立体的な造作はない。軸は灰オリーブ色(7.5Y 5/2)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台外側面に施軸され、一部は畳付部にも及ぶ。露胎部分は暗褐色を呈する。体部内底には4ヶ所の目跡が残り、上に重ねられていた椀の畳付部が融着する。

38は西側湿地帯の中央部付近で出土した龍泉窯系青磁椀Ⅱ-a類である。口径16.2cm、高台径5.7cm、器高6.3cmを測る。体部外面に16葉の鋸のない蓮弁文を施す。胎土は青灰色を呈する。軸はくすんだ灰オリーブ色(7.5Y 5/3)を呈し、体部内面の全体と体部外面の高台際まで施軸され一部は高台部外側面に及ぶ。

39は西側湿地帯から出土した龍泉窯系青磁椀Ⅱ-b類である。口径16.7cm、器高6.6cm、高台径6.0cmを測る。体部外面に23葉の鋸蓮弁文を施し、胎土は青灰色を呈す。軸は滑らかなオリーブ灰色(10Y 6/2)を呈し、体部内外面の全体と高台部外側面にまで施軸される。

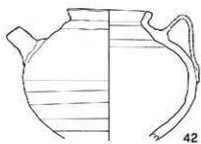
40はSK-7(№1057遺構)から出土した高麗青磁である。口径は21.4cmに復元されるので鉢であろう。体部内面の口縁部下には一条の沈線があり白色土を埋め込む。軸はオリーブ灰色(10Y 6/2)を呈し、残存部位の全体に施軸され、細かい貫入が入る。

41は包含層から出土した初期龍泉窯系青磁(初期龍泉・同安窯系青磁0類)の皿である。高台径4.1cmを測る。体部内底には葉から延びた花卉を横から見たようなデザインが彫られ、空間を櫛状工具の先端による密な点描文で埋め尽くしている。胎土は白灰色を呈し、軸を弾いた部分はオレンジ色に発色する。軸はくすんだ灰オリーブ色(7.5Y 5/2)を呈し、体部内外面の全体と高台畳付部にまで施軸される。全体的に細かい貫入が入る。

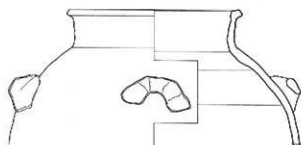
42は№752遺構から出土した陶器の水差である。口径6.7cm、胴部最大径13.9cm、残存高10.4cmを測る。プロポーショナル的には水差Ⅵ類に類似するがそれよりもかなり小振りであり、耳もなく、無軸である。底部は平底になるのであろうが、残存部位からは不明である。器表の色調は暗灰色、器壁内面は灰色又は淡褐色を呈する。

43は西側湿地帯から出土した陶器の盤である。底径11.4cmに復元される。胎土には1mm以下の白色及び黒色の砂粒をやや多く含み器表はざらざらとした触感がある。露胎部分の色調は灰色である。内面のみに黄軸が掛けられ鉄絵により施文される。残存部位が少ないものの、盤Ⅰ-2bに分類されるものと思われる。

44は西側湿地帯から出土した陶器の耳壺である。口径14.0cmに復元される。肩部に横形の簡素な耳が付く。胎土には白色及び褐色の細粒が少量含まれるものの緻密であり、淡い橙色を帯びる。器表の色調は暗紫褐色を呈する。



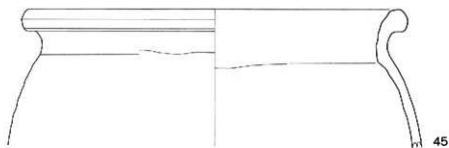
42



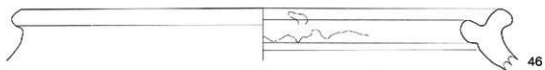
44



43



45



46



47

第26図 その他の遺構出土遺物実測図・4(縮尺1/3)

45は北側湿地帯から出土した陶器の甕である。残存部位が小さくやや不正確ではあるが、口径30.7cmに復元した。胎土には1mm以下の白色粒を多く含み、橙褐色を呈する。器表の色調は暗紫褐色である。

46は北側湿地帯から出土した陶器の甕である。口径は40.0cmに復元される。

47は西側湿地帯の南寄りから出土した陶器の盤である。胴部最大径は48.2cm、底径40.0cmに復元される。胎土には砂粒を多く含み、灰色を呈する。黄軸による施軸が内面の全体と外面の上端に確認されるが、内面の大半は剥落する。内面底部には重ね焼きの目跡が残る。外面の露胎部分は灰色を呈し、部分的に淡い橙色を帯びる部分もある。

48は西側湿地帯から出土した東播系須恵器の鉢である。復元口径29.6cm、器高10.2cm、底径11.1cmを測る。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る、板状工具で粗く成形する。胎土には白色の砂粒を少量含むが緻密であり、灰色を呈する。

49は西側湿地帯から出土した東播系須恵器の鉢である。復元口径31.8cm、器高10.7cm、底径11.4cmを測る。胎土には白色の砂粒をやや多く含むが緻密で堅牢である。色調は灰色を呈する。内面には水引きの跡がやや明瞭に残る。

50は西側湿地帯から出土した甕である。口径は16.5cmに復元される。口縁端部は丸くおさまられる。胎土には白色の細粒を少量含むが緻密であり、灰色を呈する。胴部の外面には斜め方向のタタキ痕、内面には同心円状のタタキ痕が残される。口縁部には内外面ともに丁寧にナデ調整が施されており、器表の触感はとても滑らかである。中世の須恵器であるものの、その産出地については結論を見出せない。

51は西側湿地帯の南寄りから出土した東播系須恵器の甕である。復元口径21.9cmを測る。口縁端部は上に擠みだされる。外面には斜め方向の連続したタタキ痕が残る、内面はナデ消される。胎土には2mm程の砂粒や黒色の粒を少量含むが緻密である。

52は西側湿地帯から出土した中世須恵器の椀の高台部である。高台は平高台で外底は僅かに窪み、回転糸切り痕が残る。側面は外湾する。高台の径は4.5cmである。胎土には白色の細粒を少量含むが緻密であり、灰色を呈する。

53も西側湿地帯から出土した中世須恵器の椀の高台部である。径4.7cmの平高台であり、側面は外湾し、外底部は僅かに窪み回転糸切り痕が残る。胎土には1mm以下の白色の粒が含まれるが緻密であり、灰白色を呈する。

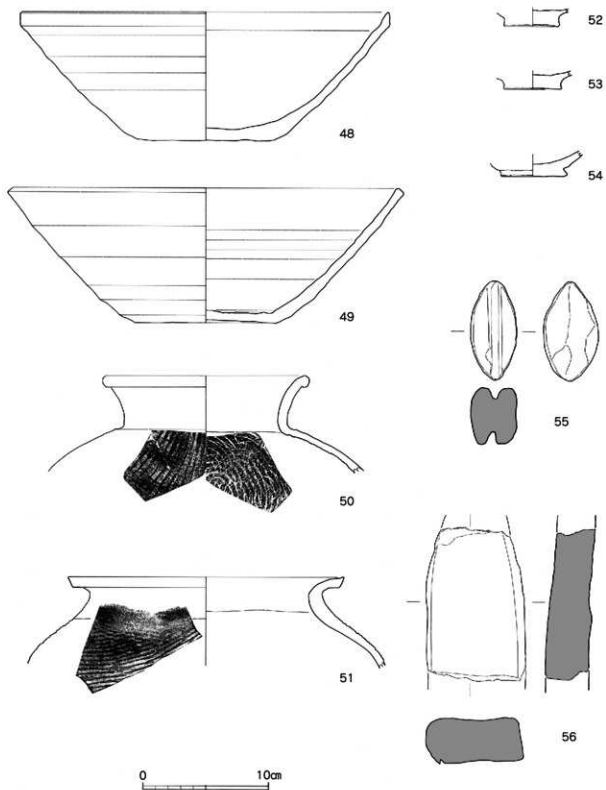
54は西側湿地帯から出土した中世須恵器の椀の高台部である。底径5.3cmを測る。

55はNo.786遺構から出土した土鐘である。長さ7.9cm、幅4.4cm、厚さ4.5cm、重さ100.3gを測る。

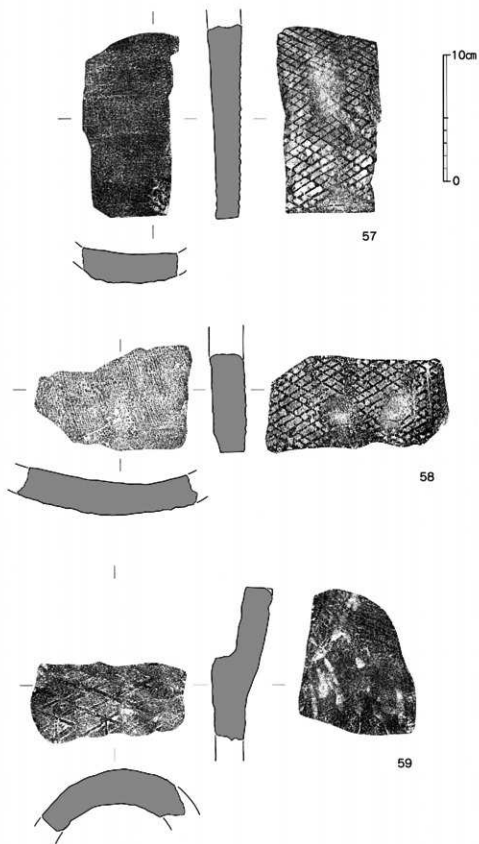
56はNo.1058遺構から出土した棒状土製品である。上端部と下端部を欠損し、残存長12.0cm、幅7.2cm、厚さ3.0～3.6cmを測る。胎土にはスサ及び砂粒を少量含み、色調は表面とともに橙褐色を呈する。2次的に熱を受けた痕跡は特には見られない。

57は西側湿地帯から出土した平瓦である。凹面には布目痕、凸面には斜格子状のタタキ痕が残る。布目痕の糸の間隔は6～8本/cm、格子目の間隔は5～6mmである。

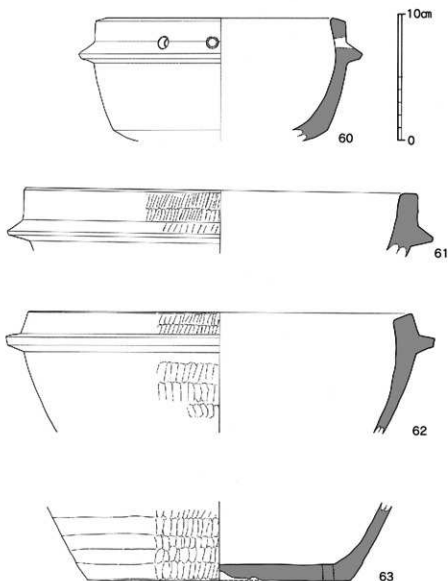
58は西側湿地帯から出土した平瓦である。凹面には布目痕、凸面には斜格子状のタタキ痕が残る。凹面の先端部分は面取りが施される。布目痕の糸の間隔は6本/cm、格子目の間隔は5～7mmである。



第27図 その他の遺構出土遺物実測図・5(縮尺1/3)



第28図 その他の遺構出土遺物実測図・6(縮尺1/3)



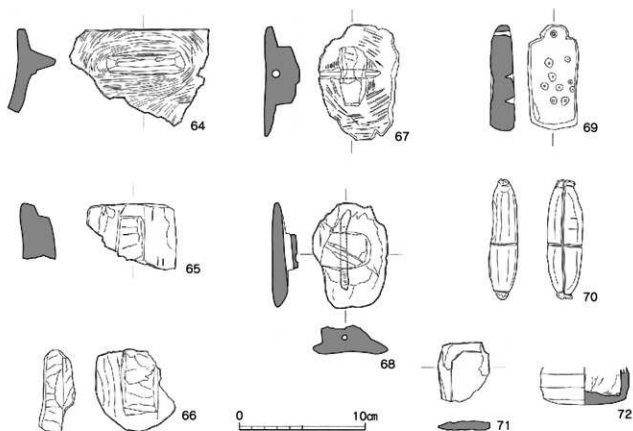
第29図 その他の遺構出土遺物実測図・7(縮尺1/3)

59は西側湿地帯から出土した丸瓦である。凸面に斜格子状のタタキ痕、凹面には布目痕が残る。斜格子の間隔は13～15mmを測る。布目痕は二次調整により不明瞭である。

60は西側湿地帯から出土した滑石製の石鍋である。復元口径19.7cm、復元底径17.0cmを測る。口縁部下に鈎が巡り、その直上に約3cmの間隔において直径1cmの孔が2つ穿たれるが、器表外面には煤が付着するものの穿孔の内部には付着が見られないことから、廃棄後に穿たれた可能性もある。過度の被熱によるためか表面には内外面ともに無数の痘痕状の穴があり、器面調整は殆ど確認できない。

61は西側湿地帯から出土した滑石製の石鍋である。復元口径は31.3cmを測る。口縁部下には鈎が巡り、外面には煤が付着する。

62は西側湿地帯から出土した滑石製の石鍋である。復元口径30.5cmを測る。口縁部下には鈎が巡る。鈎から下は急激に器壁が薄くなっており、口縁部付近では1.7cmあった厚みが、底部付近では0.7cm程しかない。



第30図 その他の遺構出土遺物実測図・8(縮尺1/3)

63は西側湿地帯から出土した滑石製の石鍋の底部付近である。復元底径は20.9cmを測る。底部の外縁部には直径1cmの穴が穿たれている。内面底部には煤が付着しているが、割れ口にも付着しているので廃棄後に付着したものであろう。

64は西側湿地帯から出土した滑石製石鍋の再加工作品であり、鉤をつまみとして利用する。口縁部下の鉤を約6cm残して両端を削り落し、器表の煤を落とすためであろうか、先端の鋭利な棒状の工具で表面を粗く削り落している。この粗削りが施されていない鉤の下面には煤が薄く残されている。また内面も板状工具により表面を研磨している。

65は西側湿地帯から出土した滑石製石鍋の再加工作品であり、方形の耳をつまみとして利用する。耳を中心として器壁を幅6.7cmに切断している。また耳の上端部を削り落し、耳周辺は器表を薄く削り落している。

66は北側湿地帯から出土した滑石製石鍋の再加工作品であり、方形の耳をつまみとして利用し、耳を中心として楕円形状に周囲を削り落している。

67は西側湿地帯から出土した滑石製石鍋の再加工作品であり、方形の耳をつまみとして利用する。耳の端部と上面を加工し、側面に孔を穿つ。また耳の周辺は板状或いは棒状の工具により表面を粗く削り取られる。

68は西側湿地帯から出土した滑石製石鍋の再加工作品であり、方形の耳をつまみとして利用する。耳の基部には穿孔があり、耳の周囲は表面が薄く削り取られる。耳の上面は破断しているが、ここにも穿孔の痕跡が残る。

69は西側湿地帯から出土した滑石製品である。重さ124.9gを測る。錘或いは椎などの用途が考えられる。石鐮の湾曲は残されていない。1箇所に穿孔、9箇所に穿孔を中断したかのような窪みがある。

70は西側湿地帯から出土した滑石製の錘である。重さ89.2gを測る。体部の表裏と両端部に十字の切れ込みが入る。

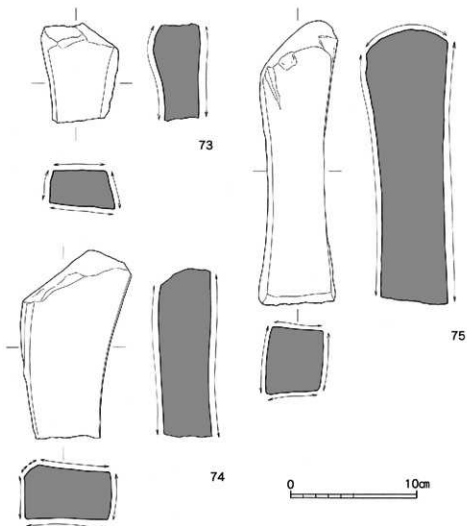
71はSK-10 (No.1064遺構) から出土した滑石製の硯である。廃棄後に研磨され非常に薄くなっている。実用品であったかについては疑問が残る。

72は北側湿地帯から出土した滑石製の容器である。底径6.5cmに復元される。

73は西側湿地帯から出土した角柱状の砥石であり、4面の砥面をもつ。上端部と下端部を欠損する。残存長7.7cm。砂岩製。

74は西側湿地帯から出土した角柱状の砥石であり、主な砥面が4面と、角を利用した小さな砥面が2面ある。残存長14.8cm。砂岩製。

75は西側湿地帯から出土した角柱状の砥石である。下端部は欠損するが、丸みをもった上端部も砥面として使用されており、計5面の砥石面がある。残存長22.4cm。砂岩製。



第31図 その他の遺構出土遺物実測図・9(縮尺1/3)

IV. おわりに

1. 掘立柱建物跡の時期について

1～5号の掘立柱建物跡の柱穴からは少数の遺物の出土があるが、図示できるものは僅かであり年代決定の根拠に乏しい。しかしながら、1号掘立柱建物跡のP-5, 7, 9, 19からは回転系切りによる土師器小皿の出土があり、P-18からは龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類の小片の出土がある。また、第17図に掲載した2点の土師器小皿の計測値は、1・2次調査のSX-34と近似しており、13世紀初頭前後の遺構であると判断できる。2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡からは瓦器碗の出土があるが、小片であるため12世紀中頃～13世紀前半という幅をもって考えたい。4号掘立柱建物跡と5号掘立柱建物跡は土師器杯などの出土があるが小片であるため年代決定の根拠を欠く。

2. 木棺墓について

3次調査区内で検出された唯一の墓である。群を成すことなく単独で居住区域の一角に造墓された屋敷墓である。棺内には6点の輸入青磁が副葬されており、ありきたりな表現ではあるが、有力者の墓であることは間違いない。时期的には13世紀初頭前後であり、底をもつ1号掘立柱建物跡と同期であるので、両者間には直接的な関連性があるものであろう。旧怡土郡における12世紀後半～13世紀初頭前後の厚葬例は、輸入陶磁器の副葬(供献)という観点からは、吉森遺跡1・2次調査、森田遺跡(4基)、瀬崎中牟田遺跡、東真方遺跡、三雲堺遺跡で確認されており、複数点以上に副葬する墓はこの内の瀬崎中牟田遺跡、三雲堺遺跡の2遺跡である。出土品の内容は、瀬崎中牟田遺跡木棺墓が陶器水差Ⅱ類1点、龍泉窯系青磁碗1点(Ⅱ-b類)、龍泉窯系青磁皿1点(Ⅰ-2d類)、同安窯系青磁皿3点(Ⅰ-1b類2点+Ⅰ-2b類1点)、草花双鳥鏡1点、三雲堺遺跡木棺墓が龍泉窯系青磁碗2点(Ⅰ-2a'類+Ⅰ-4b類)、小刀1点、土師器小皿5点である。佐藤浩司氏の研究^{※)}を援用すれば、陶磁器と鏡を副葬する瀬崎中牟田遺跡木棺墓の被葬者は「郷単位で土地を掌握できた階層一郷の在地領主」、陶磁器と土器と鉄器を副葬する三雲堺遺跡木棺墓の被葬者は「郷の中の複数の集落を統括できた階層一名主クラス」となり、陶磁器のみしか副葬されないがその数が多い吉森遺跡3次調査区木棺墓の被葬者は「上層(有力)百姓層クラス」に該当するものであろう。なお、大野城市の栗師の森遺跡第3次調査でも龍泉窯系青磁碗2点、同安窯系青磁皿5点を副葬する木棺墓が検出されているなど、福岡県内では陶磁器を多量に副葬する墳墓が数例確認されている。

3. 湿地帯出土陶磁器について

調査区の北側及び西側縁辺部には、元は湿地帯であったと考えられる黒色の粘質土が堆積する部分があり、多くの遺物を包含していた。遺物には土師器、瓦器、瓦、滑石製品、砥石などとともに、多くの輸入陶磁器が含まれていた。比較的遺存状態の良い陶磁器が多く、器としての機能を失したものを廃棄するのは当然の事なのかも知れないが、僅かに破損した陶磁器をも惜し気もなく廃棄している様子が窺える。また分析の詳細については近隣の別遺跡との比較を含めて今後の検討課題としたいが、1500点余りの輸入陶磁器の内訳は白磁72%、青磁25%、その他3%であり、うち白磁碗の内訳は、Ⅰ類1%、Ⅱ類6%、Ⅲ類0%、Ⅳ類52%、Ⅴ類6%、Ⅴ類又はⅥ類12%、Ⅴ類又はⅥ類又はⅦ類12%、Ⅵ類4%、Ⅶ類1%、Ⅷ類4%、Ⅸ類2%である。青磁の内訳は越州窯系5%、龍泉窯系63%、同安窯系32%であり、龍泉窯系青磁碗は、Ⅰ類が62%、Ⅱ類が38%であった。近隣の遺跡で出土が希なものとしては、白磁壺、白磁皿Ⅱ-1b類、龍泉窯系青磁小碗、同安窯系青磁小碗、黒釉陶器などがある。

※佐藤浩司2001「豊前地域における中世墳墓の副葬品」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』

图 版

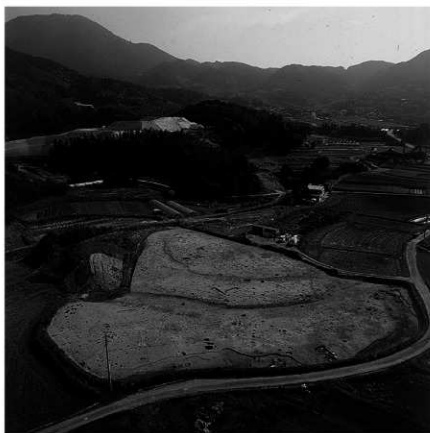


調査区全景(空中写真)

図版2



調査区上空から十坊山方面を望む(空中写真)



調査区上空から浮嶽方面を望む(空中写真)



調査区上空から唐津湾方面を望む(空中写真)



木棺墓周辺(空中写真)

図版4



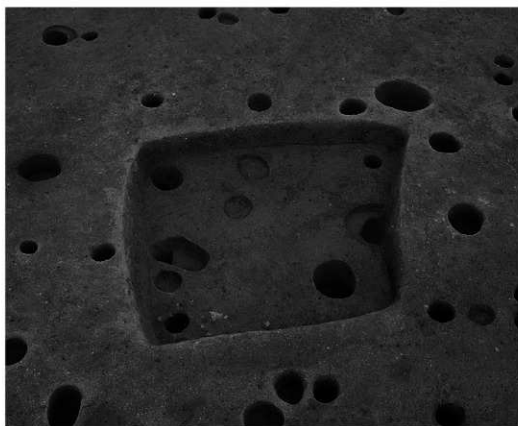
埋壘遺構(北から)



井戸状遺構(南から)



1号竪穴遺構(南から)



2号竪穴遺構(南から)

図版6



木棺墓全景(南から)



木棺墓内遺物出土状況(西から)



方形石組遺構(南から)



円形石組遺構(南から)

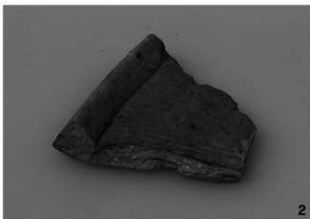
图版8



埋甕遺構出土遺物



1



2



3

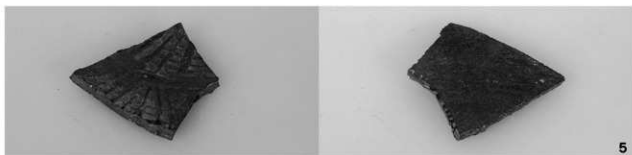
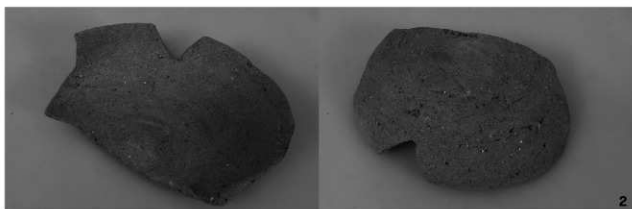
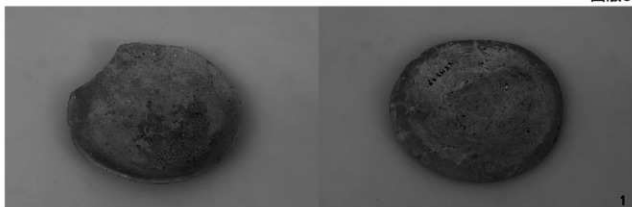


4



5

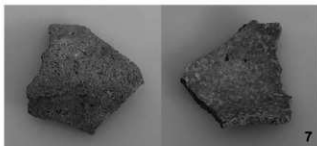
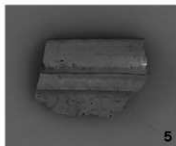
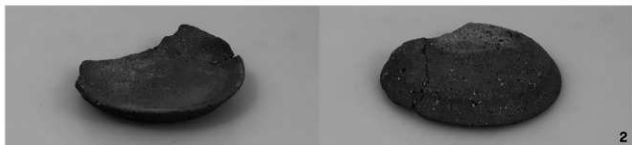
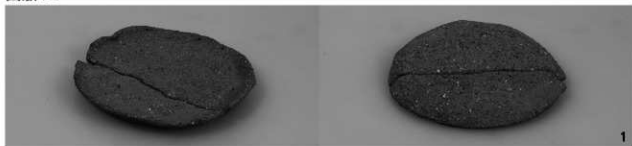
石組遺構出土遺物



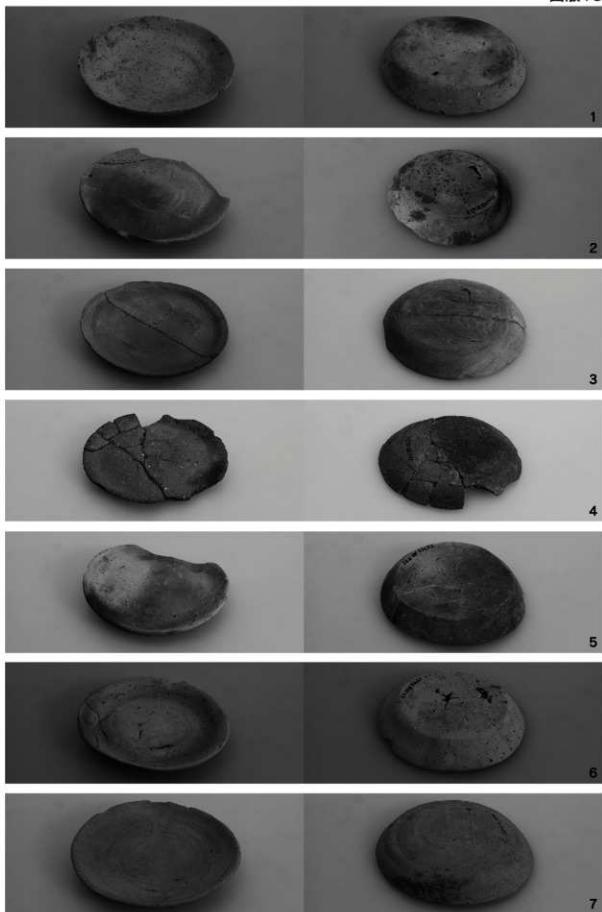
井戸状遺構出土遺物





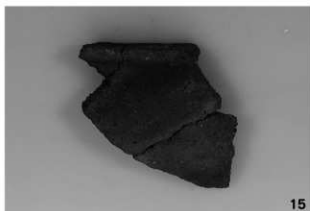


掘立柱建物跡出土遺物



図版14





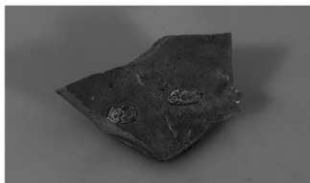
15



16



17



18



19

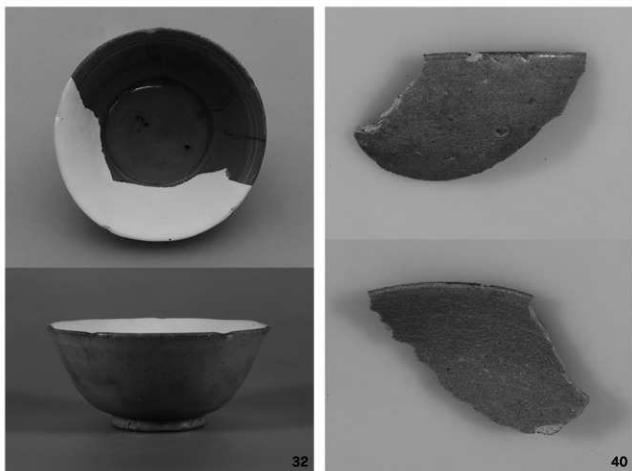








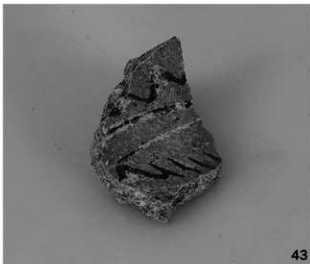
その他の遺構出土遺物・7





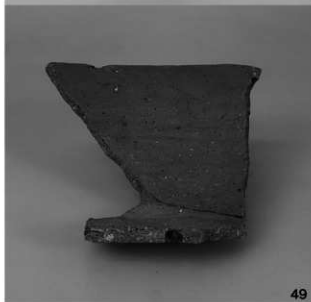








48



49

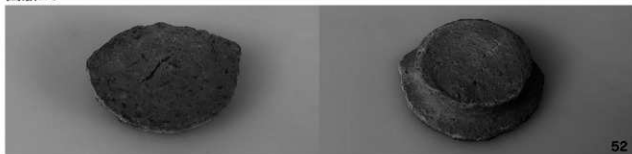


50



51

図版26





57



58



59





図版30



報 告 書 抄 録

ふりがな	よしもりいせき2
書名	吉森遺跡II
副書名	中山間地域総合整備事業福吉地区関係埋蔵文化財調査報告
巻次	V
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	村上 敦
編集機関	糸島市教育委員会
所在地	〒819-1392 福岡県糸島市志摩初30番地
発行年月日	2012年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉森遺跡	福岡県糸島市 二丈吉井字吉森	40230		33° 29' 19.5"	130° 4' 41"	20011001) 20020329	4,200㎡	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉森遺跡	集落	平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡 木棺墓	輸入陶磁器 土師器 瓦 滑石製品	木棺墓内からは 2点の龍泉窯系青磁碗、 4点の同窯系青磁皿 が出土。

吉 森 遺 跡 II

糸島市文化財調査報告書
第8集

2012年3月31日発行

発行 糸島市教育委員会
〒819-1392 糸島市志摩初30番地
TEL 092-323-1111

印刷 株式会社インテックス福岡
〒812-0892 福岡市博多区東那珂1丁目15番1号
TEL 092-477-7002